
魔女猫番外地

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女猫番外地

【Nコード】

N0102K

【作者名】

たまさ。

【あらすじ】

たまさ。がメインで書かせていただいている【魔女と白い猫】のおまけ、小話をこちらに納めさせて頂きました。

【魔女と白い猫】の小話をぽつぽつのせていこうかな、と思います。本編【魔女と白い猫】10/30に無事完結致しました。

魔女と使い魔の邂逅・使い魔編

月の綺麗な晩だった。

青白い月は柔らかく大地を照らす。

丸くて大きな月は、青白くてどこか物悲しい。

満月かな、とぼくは思ったけれど、かすむ瞳にそれはよく判らなかった。

満月ならいいな。

ぼくはか細い吐息を落とす。

満月の日に死ぬのなら、なんとなく諦めがつく。

ぼくは小さなちっばけな蝙蝠だ。

魔物でもあるけれど、これといって何ができる訳では無い。ほんのちよっぴり魔法が使えたり、人間のように変化することはできるけれど、ぼくにできるのはそれくらいで一族の中でもつまはじき。

一族がそろつ洞窟を追い出されたのは、仕方ないことなのかもしれない。

ぼくみたいな役立たずが一族にいることを、みんな嫌がる。

一人ぼっちのぼくは、はたはたと飛んで　　疲れて、疲れて、や
つと休んでいたところで猪に跳ね飛ばされた。

ぼく気づかなかつたんだよ。

休んでいた枝がそんな低い場所だったなんてさ。

だからぼくは一人、こんな場所で死んでいくんだ。

だから満月ならいいな。
月の光が優しい…………

なんてぼくがぼんやりと思っていたら、突然あたたかな光を感じた。

何かが月光に照らされる地面を更に照らす。

なんだろうと思えば、ふいに羽を持ち上げられた。

「蝙蝠？」

痛い。

少し高い声と同時に、ぼくは誰かにつままれた。

それは月を背負った一人の少女。
赤味の強い金髪。眼差しは琥珀。

「怪我ならいつか」
ふむ、と小さな呟き。

少女は笑んだ。
とつても嬉しそうに。

彼女はぼくの皮膜をびろりと広げた。
痛くて、おもわず身が震えた。

「キ……………」

ぼくは痛みに小さく鳴いた。

少し驚いた様子の彼女は、ふいに「生きてる………？」と囁く。

もう死にそうだけれどね。

やがて彼女は「まあ、いいか」と小さく呟いた。

なにがいいんだろう？

ぼくが不安に思っていると、彼女はおもむろにぼくに何かの光を近づけた。

それは優しい光。

ちっばけな魔物のぼくにもそれはわかる。

月の光だ。

彼女は自分の指先に歯をたてて、ぷくりと自らの血を出すと、口の中で何事かを呟いてぼくの口にその血を落とした。

途端、ふわりとぼくの体に風が流れた。

物凄い力が巡り、痛みがひく。

ぼくの中で何かが一気に駆け抜けて、やがてゆるりと落ち着いた。

ぼくは物凄くびっくりした。

彼女は魔女だ。

可愛くて、優しい、魔女。

こんなちっばけなぼくを救い上げ、使い魔にしてくれた！

月の光と魔女の血で、ぼくを使い魔にしてくれたのだ。

「ああ、魔女さま………ありがとうございます」

ぼくの声はかすれた。

喜びで全身が震える。

魔女はびっくりしたように瞳を瞬いた。

うわぁ、可愛いなぁ。

こんな可愛い人がぼくの魔女さま。

ぼくのマスターなのだ。

「魔物だったの？」

小さな呟き、ぼくは畳み掛けるように言う。

「ぼくのようなちっぽけな生き物を使い魔にしてくれるなんて、ぼく……………」

感極まって言葉が続かない。

でもぼくは精一杯の気持ちを込めてもう一度口をひらいた。

「ぼく、魔女さまに、いえ、マスターに一生ついていきます！」

「……………」

マスターはしばらくぼくを見つめていたけれど、やがてにっこりと微笑んだ。

「そんなことはどうでもいいのよ。

あんたにはあんたの人生があるの。だからあたしのことは忘れていいわ。

元気でね。じゃああたし帰るから」

マスターはゆっくりと身を翻し、いつてしまう。

なんて優しく謙虚なマスター。

ぼくのことをこんなに思ってくれるなんて。

ぼくは身がふるふると震えるほど感動した。

ぼくの人生なんて、もうマスターなしでは考えられない。

ぼくは感激でマスターからだいぶ距離をとってしまったけれど、大丈夫。

ぼくはマスターの血を頂いたのだもの。

マスターの使い魔として、マスターの居場所は今どこにいたってばっちり判る。

一生ついていきます、マスター！

魔女と使い魔の邂逅・使い魔編（後書き）

感想などいただければめっちゃくちゃ喜びます。

魔女と使い魔の邂逅・魔女編（前書き）

魔女と使い魔の出会いの話。

魔女と使い魔の邂逅・魔女編

月の綺麗な晩だった。

青白い月の光は柔らかく大地を照らし出す。

こんな夜は空を飛ぶのも、大地を歩むのも楽しい。

背をくんと伸ばして、手の中で光球をひよいひよいと垂直に投げては手の中に納める。

ランタン代わりに月の光を凝縮してみたけれど、あまり必要ないかもしれない。

月のきれいな晩。

ただし、それは十五夜ではなくて 月齢で十三。ほんの少しだけ月は欠けていた。

何かが起こる時は、月がまん丸に肥え太っているのが好ましい気がするけれど、その日は生憎と月は欠けていた。

「つと」

あたしは手の中の球を取り落とした。

大地に落ちた光球は、ころころと地面を転がり木にぶつかってぴたりと止まった。

あたしは肩をすくめて球をとろうと手を閃かせ、光球に照らし出された木の陰にそれを見つけたのだ。

「蝙蝠？」

蝙蝠が落ちている。

死んでいるのだろう。

あたしは瞳をまたたいて、それから蝙蝠の羽をつまむようにして掴んだ。

薄い皮膜に傷がある。

怪我をして落ちたようだ。

「怪我ならいつか」

ふむ。

あたしはにんまりとした。

明日の天気はきつと晴れ。

ならば天日干しにして干物にしよう。確か、あたしの数少ない蔵書の中に蝙蝠の干物を使ってつくる丸薬があった。

病気の蝙蝠はちょっと薬にしたくないけど、怪我で死んだなら薬にしたっていいだろう。

あたしが手の中の蝙蝠をびろりとひろげて確かめていると、それはそろりと身を震わせて瞳を開けた。

丸くてつぶらな感じの瞳。

うつ。

「生きてる……………」

チツ、生きてるのかぁ。

死なないかしら？

さすがに自分で殺すのはやなのよ。

「キ……………」

蝙蝠がか細い声で鳴く。

弱々しく身を震わせる。

あたしは嘆息した。

「まあ、いいわ」

瀕死の生き物って、そのまま放置するのも後味悪いしね。

あたしは先ほどから足元に転がっている月の光球を思念で動かして、蝙蝠に近づけると月の魔力と同時に、自分の指先に歯をたてて血を出し、蝙蝠の口元に数滴、垂らした。

弱き生き物に月と魔女の加護を。

蝙蝠の小さな傷がふさがる。

大きな怪我ならこの程度では治らない。薬だって使わないといけなし、魔力だけでどうにかするには、長大な時間が必要だ。まあこの程度なら簡単に治癒できる。

ふふふ、魔女ってやっぱりすごいと思うわ。

「ああ、魔女さま………ありがとうございます」

突然その蝙蝠が喋るものだから、あたしはギョツとした。

いかんせん「干物」としか見ていないものだから、いちいちそれが普通の蝙蝠か魔物かなんて考えてもなかったのだ。

だからその時のあたしは「うわっ、干物がしゃべった」くらいの感覚で随分とぎよつとした。

「魔物だったの？」

あたしは手の中の「干物」もとい、蝙蝠を見下ろしていった。

「ぼくのようなちっぽけな生き物を使い魔してくれるなんて、ぼく………」
「使い魔？」

は？

何の話だ。

と、ふいに思い出す。

確かに、魔女、魔導師などの不思議な力を操るものと魔物は、月の加護と血のもとで「契約」を取り交わすのだ。

「ぼく、魔女さまに、いえ、マスターに一生ついていきます！」

「……………」

月の加護と魔女の血を取り入れた蝙蝠がはたはたとためいている。

今のナシ。

あたしはにっこりと微笑んだ。

「そんなことはどうでもいいのよ。
あんたにはあんたの人生があるの。だからあたしのことは忘れていいわ。」

元気でね。じゃああたし帰るから」

あたしはくりりと身を翻し、さっさと歩き出す。

今のナシ。

今のナーシ。

もしくはチェンジ。

あたしはまったく関係ありません。

せつかく使い魔にするなら、蝙蝠なんて脆弱な生き物じゃなくて、

魔女シエルティが使ってる火蜥蜴とかのほうがいい。蜥蜴の癖に火をあやつるのよあいつ。

蝙蝠に何ができると？

逆さまにぶら下がるくらいしか能がなさそうな蝙蝠など欲しくない。どうせなら干物のほうがずっと良かった。

あたしはきっぱりと意識を切り替え、やれやれと自分の家に帰宅した。

翌朝、自分の部屋に蝙蝠がぶら下がっているのを見た時の脱力感は今も忘れていない。

幾度「お使い」と称して僻地に送ってもそのつど帰って来る蝙蝠に、あたしはそのうち色々諦めた。

まあ、いいか……………

魔女と使い魔の邂逅・魔女編（後書き）

こうして使い魔の「本当は不憫なんだけど不憫と気づかない
幸せな生活」がはじまるわけです。

えっと……うん、使い魔は幸せですよ？

使い魔の独白

ねむい、ねむいなあ。

ああ、どうも。

ぼくは愛すべき魔女ブランマーシユの使い魔、あまり名前は呼んでもらえないけれどシユオン、と申します。

ぼくの本体は蝙蝠です。

暗いところは好きだし、どちらかといえば夕方に起き出したいんだけど、今は朝。

愛すべきマスターの朝食の用意をするのもぼくの大事な仕事です。

いぜんぼくがちらつと「朝は弱いんですよねえ」とぼやいたら、心優しいマスターが、

「じゃあ鳥タイプの下僕でも捕まえるかなあ。あいつら朝は早いでしょう」

とこともなげにいつてましたが。

断然・全力で・却下です！

マスターの使い魔はぼくだけで十分！

そんな訳のわからないヤツを迎え入れるくらいなら、ぼくはどんな現状にだって耐えます。

マスターはぼくだけのマスターであって決して他の誰かのマスターであっては駄目です。

ぼくは朝食の準備をすませ、マスターが寝ている寝室を覗き込みました。

すぐに起こしたりしません！

まずは観察です。

寝てます　　ううう、可愛いなあマスター。

ぼくが昨夜ベッドメイキングした寝台は、何があればこんなになるのだろうという程に乱れまくり、シーツははがれ、布団は団子のようになつてマスターの手足がからみついている。

抱き枕を作つてあげようかな、なんて思うけれどそれはしません。

だつて！

布団を抱いてるのだから良いのですよおお。

ネグリジエからはだけてる健康的で艶やかな足だとか、時々腹まで見えちゃつてるトコとか！

抱き枕があつたら全部布団の中に隠されてしまふじゃないですかあ。そんな残念なことはぼくには到底できません。

ああ、ヨダレなんてたらしちゃつて、可愛いったらありやしない。ぼくはにまにま緩んでしまふ口もとをひきしめ、ハンカチでちゃんとヨダレを拭つてあげます。

そうしてやつと、マスターに声を掛けます。

「マスター、おきてくださいよあ。

朝ですよ？

スープが冷めちゃいますよ」

「ん、んん……あとちよつと」

もそもそとつごいて、温かいところを求めるマスター。

艶やかな赤味の強い金髪が寝台の上で散ってます。

少し癖があるけれど、ふわふわとして可愛い。

「マスター」

「んん」

むにゅむにゅと口が動く。

何か呟いたと思えば、マスターの手には杖。

それをおもむろにこちらに振りかざし、ぼくは避けようと思えばよけられるけれど、おとなしくソレを頭で受けた。

痛い、痛い、痛いけど………幸せ。

「マスター、おきて下さいよお」

ゆるゆるとマスターの瞼が開いて、金色の眼差しがこちらを捕らえました。

金色。

それはきつと角度によって、光の反射がそう見せるんです。

よくみれば柔らかな琥珀のような美しい瞳。

朝の潤んだ瞳でみあげてくるマスターは

犯罪的に可愛い。

こんな可愛いマスターをもったぼくは世界一幸せな使い魔に違いない。

しばらくぼうつとぼくを見ていたマスターでしたが、ふいににっこりと微笑んだ。

「シュオン」

名前を呼ばれると鼓動が跳ねる。

甘えたような声。

「昨日ね」

「はい」

「いいこと考えたの」

ふふふっと、魅惑的な笑みを浮かべてマスターはぼくの頬に触れました。

ときどきときどき。

マスターはどんな素敵なことを考えたのでしょうか。

ぼくは口元がだらしなく緩むのを感じます。

「こないだあたしのことを、能無しだの下らぬだのと吐き捨てたあのエイル・ベイザツハの顔を蒼白にしてやる作戦よ」

マスターは同じ魔力を操るものとして、エイル・ベイザツハ魔導師と顔をつき合わせてはくだらない
いえいえ、高尚な言い合いをしているのです。

エイル・ベイザツハは努力の人。

勤勉で、魔道に関しては貪欲。

そしてマスターは努力しなくてもできると信じつつヘマをする、ちよっとおつちよこちよいなところがあるから、どうしても仲良くなれないんじゃないかな。

まあ、ぼくのマスターがぼくがいと仲良くしないのはとってもいいことです。

マスターはすいっと杖を閃かせる。

「あんたがエイルの顔で男をたぶらかせばさすがにあのスカした顔も色を変えるわよ！」

……………それ、ぼくがやらないと駄目ですか？

いや、はい、マスターがやるなんてとんでもないです。
はい……… ぼくの愛は不滅ですから。

何があっても。

大魔女とチビ魔女（前書き）

5000ユニーク、45000PV突破ありがとう記念。第一弾。
ってか本当は1万ユニークとかでやるほうがいいんだろっけど、嬉しいんだからいいんだよスペシャル。

レイリッシュとチビの頃のブランマーシュ

大魔女とチビ魔女

十歳の頃だと思う。

あたしがその魔女に引き合わされたのは。

だと思っつていうのは、いちいち産まれた日なんて祝ってられる程裕福な家じゃなかったってコトが理由。物凄く大雑把に、あんたは寒い時期に産まれたっけね、なんてちよつとボケの入ったばあちゃんと言っていた。

ばあちゃんの話だから、それだってあやしいんだけどね。

エリイフィアに「あんたいつ産まれたんだい？」といわれた時、あたしはやっぱり大雑把に「寒い頃」と応えた。

やがてエリイフィアはこう言った。

「あんたが私の娘になったのは温かい風が吹く季節。

白い花ソルシェの月。その七日目のことだ。だからあんたはこれからその日に産まれたってことで一つづつ年を刻むといい」

その意味が判らなくて、でも嬉しいってことだけは判った。

エリイフィアはあたしの姉で師匠で、そして母親なのだ。

「じゃあ、レイリツシュ様はあたしのばあちゃんだね」

そう言っただのは、黒髪の大魔女と初対面をすませたあとだ。

あたしは物凄く驚いていた。だってレイリツシュときたら今までみた誰よりも綺麗だった。

艶やかな黒髪も、口元に塗られた真っ赤な口紅も、全てが全て綺麗だった。

そのレイリツシュを示して、エリイフィアは言ったのだ。
「この方は私の師匠。レイリツシュだ」
って。

師匠の師匠だから大師匠。

お母さんのお母さんならばあちゃん。

あたしだってそれくらいの常識を知っているのだ。

レイリツシュはにつこりと微笑した。

物凄く綺麗な微笑みだった。うつとりするほど綺麗。
その手がおもむろにあたしの頬をぐにりとひっぱり。

「口は災いを呼ぶのよ、末っ子」

「ひひやや」

「あたくしのどこをみてそんな単語がでるのかしら？ あんまり可愛くないと苛めてあげるわよ？」

「レイリツシュ、辞めて下さい。子供のいうことではありませんか」
「あんたの教育が悪いのではないの？ エリイフィア」

レイリツシュはそういうと、エリイフィアの頬までつねりあげた。

あたしはびっくりした。

慌てて両手を伸ばしてレイリツシュの腕に縋る。

「エリイフィアを苛めないで！」

「あら、駄目かしら？」

勿論駄目だ。

「ふふふ、師匠が好き？」

「好きだよ。エリイフィアはおかあちゃんだもの」

本当のお母さんはお別れしなければならなかった。

一人で寂しくて何度も泣いた。
そのたび、エリイフィアはあたしを抱いて寝てくれた。

魔女はどうしたって修行しなければいけないんだ。親元にて親を傷つけてしまった魔女は一杯いる。

仕方の無いことだけれど、あんたは親の前でちゃんと笑えたね、あんたは偉いよ。私はあんたを誇りに思う。

だから、あんたは立派な魔女におなり。

「可愛い末のブランマージュ。」

あなたが無事に修行を終えたらあたくしの大陸へいらっしいな。

未熟なあなたがいても平気なくらい平和な場所を用意してまっけてあげるわ」

「エリイフィアの大陸は駄目なの？」

「魔女は家族だけれど、直接の師匠と弟子とは同じ大陸にいてはいけないの。」

そういう約定　これは人間との間に定められている約定だから。だからあなたは私の大陸においてなさいな」

さんざひっぱった頬を優しく撫でて、レイリツシュはすつと体を起こした。

「それと、ブランマージュ」

「なに？」

「私のことはレイリツシュとお呼びなさい。」

様なんてつけなくてよくてよ。魔女は家族なのだから

「

その代わり、

「今度おばあちゃんなんて言ったら頬をつねるだけではすまなくてよ？」

レイリッシュの年齢は永遠の謎だ。

大魔女とチビ魔女（後書き）

次はエイルとレイリツシュ。

最後の予定でロイズの小話の予定です。

エイル・ベイザツハの深淵（前書き）

うんたらかんたら（もう適当入った）記念第二弾！
レイリツシュとエイル・ベイザツハの邂逅編。

エイル・ベイザツハの深淵

大陸には六人の魔女がいる。

魔女は魔力の源。魔力の結晶。

その能力は未知数であり計り知れない。

エイル・ベイザツハが対面を果たした魔女は黒衣のドレスに魔女らしい帽子、その唇は赤く引き結ばれた美しい女だった。

腰まですらりと伸びた黒髪の、美女。

「あれが……」

誰かの言葉が耳に入り込む。

続くことのなかった台詞だが、誰もが思っていただろう。

あれが、レイリツシュ。

この国の王に仕える、宮廷魔女レイリツシュ。

それはすなわち、魔導師達の頂点に君臨するもの。

魔導師達にとってそれは王よりも揺ぎ無い存在だ。

魔女とは。畏怖の象徴である。

だが絶対的悪に落ちぬ為の制約が幾つか存在し、魔女達はそれを律しているのだという。

魔女が廊下を歩めば、その畏怖に知らず誰もが道をあけて頭を垂れる。

エイル・ベイザツハもそれにならった。

体が、本能がそうせよと命じるのだ。

「おまえ 見たことがあるわ」

かつりと魔女の足がエイルの前で止まる。

つと細く長い指先が伸びてエイルの顎をさらうと、ニッとその唇を引き結んだ。

「そう、おまえね」

「……………なにか？」

「おまえ、魔物を融合させて遊んでいるようね？」

あまり無体な真似ばかりしていると、身を滅ぼすわよ？」

「それが何かの咎にかかるんでも？ ヒトを使っている訳ではありません」

「ふふ、できれば人を使いたいという発言ね。」

まあ、いいわ 私達の理とおまえ達の理は違うものね？」

楽しそうに笑みを浮かべる魔女に、自然と視線が落ちそうになる。

恐怖

我知らず、血の気が下がる。ひんやりとしたものが這い登る。

今まで非道とも言われる実験を繰り返していたエイルにとって、恐怖などもつ持ち合わせていないのではないかと思っていたというのに。

それは本能を揺さぶる。

相手は、ただ、美しい笑みを湛えた女だというのに。

口腔に、意味もなく唾液がたまる。

それをゆつくりと嚥下する。

ただその行為すら 気取られることがひどく恐ろしい。

顎を撫でた指先が、そのままエイルの薄い唇をなぞった。

魔女はヒトとはまったく異なる異質な種。

魔導師が書き記した書物の一説が過ぎる。

魔女とは ヒトではないのだ。

ふふつと、魔女が笑みを刻んだ。

「精進なさいな。人として」

何が楽しいのかそつと耳元に囁き、魔女はそれまでの興味など失せた様子でエイルの横を通り過ぎた。

あいつ、魔女殿と話しをしていたぞ？

なんと羨ましいことだ。

馬鹿な囁き声が耳に触れる。

エイルはぎりつと奥歯を噛み締めた。

それまで培われていた絶対の自信のようなものが、びしりと亀裂をうんだ。

魔導師と魔女は違う。

まったく別の 決して同じ何かではない。

それをまざまざと突きつけられた。

鋭い切っ先のように。

喉が干上がるように渴いた。

もう二度と魔女になど遭遇したくない、その思いと同時にまったく別種の感情が芽生えた。

魔導師が必ず叩き込まれる、ある一人の男の名が脳裏によみがえる。一旦伏せた灰黒の瞳が、何かの儀式のようにゆっくりと、ことさらにゆっくりと開いた。

エイル・ベイザツハは口角を引き上げ、静かな笑みを湛えて歩き出

す。

先ほどの恐怖をねじ伏せて。

エイル・ベイザツハの深淵（後書き）

…… もっとこう、爽やかに生きる。

続いてはロイズの話　　ですが、こちらはまた後日upします。
読んでくれる皆様に感謝を。

ロイズ・ロックの隊長就任（前書き）

うんたらかんたら（またこれ）記念第三弾。
ロイズ・ロックの話。

ロイズ・ロックの隊長就任

おめでとう。

につこりと言われたが、どの辺りがめでたいのかロイズ・ロックには判らなかった。

「まあ、小さな町だが、警備隊長なら立派な出世だよ。おめでとう」

まあ、とりあえずは一応栄転ということでもいいのかもしれないが。

大陸の中央にて警備の任についていた。

平隊員だが、これといって欲もない。

ヤンガー・サン

実家は伯爵という爵位を持っていたが、次男である自分に何の意味も無い。実家から歩いて通える距離に隊舎があり、何の不便も無い。

爵位も無いから地位も気にせずに極普通の娘さんとなんとなく結婚して、子供は二人くらいできて、そういうのがきつと幸せなのだ

まあ、そのうちに。

などと考えていたというのに、突然の辞令だった。

南西に位置する、名前もさっぱり判らない町だ。

地図で確認したら、本当にちっぽけそうな町。

「魔女がいるぞ」

上官はニツと口元をゆがめた。

「魔女……」

生憎と、ロイズ・ロックにとって魔女なる生き物は「珍獣」だ。話には聞かし、一度や二度ならば見たこともある。ただし、遠くで。

そもそもがこの大陸に五人だとか六人だとかいない存在だ。

そうそう自分に関わるものではない。

魔女の魔力でもってこの世界の大気が支えられているとか、魔力があるから温暖な気温でいられるとか　眉唾もいいところだ。

ただし、史実として伝えられている。

その遙か昔に、魔女狩りが行われ、その後は各地で気象が荒れたり地殻変動が起こったりとたいへんだったという。

この世は魔女という魔力の柱の恩恵の上で成り立っている。

つまり、現在魔女は厳格に「保護」「管理」されているのだ。

さて、ロイズ・ロツクの左遷だか栄転だか判らぬこの人事は、家族にはたいへん喜ばれた。

父親はさっそく行く先に邸宅を一つ作り、それを息子に与えたいし、母親はその邸宅の人事をさっさと定めた。

そして兄は、苦笑した。

「紛争地帯に行かなくて良かった」

「　まあな」

「親元を離れるんだから、多少ハメを外せよ？」

「……」

「眉間の皺、とれなくなるぞ？」

兄はクツと喉を鳴らして笑い、実に母親によく似た天使のような笑顔でもって、

「彼女の一人くらいつくれ？」

などと言う。

誤解があるようだから言うておくが、別に今まで誰とも付き合ったことが無いわけではない。

大抵の女性が、何故か二度・三度のデートで「あなたは仕事が御好きですね」と深く溜息をつくのだ。

それを合図にしたように、関係はぱたりと終わる。

そういうものなのだろう。おそらく。

「そういえば、魔女殿が」

ふと、兄が呟いた。

ん？ と視線を向ければ、兄は苦笑する。

「ブランマージュ殿が暮らしているそうだね、君の任地には」

「知り合いか？」

「知り合い、という程ではないよ。あちらはこっちの名前すら知らないかもしれない」

兄はふつと視線をそらした。

「まあ、色々と覚悟して行きなさい」

「意味深に言うな。どんな覚悟だ？」

兄はしばらく無言でロイズを見上げ、やはり視線をそらした。

「……ブランマージュ殿は一番年若い魔女だ。

今はまだレイリッシュ殿の庇護を受けておいでだから、時々宮殿にもいらつしゃる」

だから知っているのだろう。

兄は宮仕えだ。

「彼女が来た後は、しばらく仕事が停滞する」

「は？」

「先日は下士官の寮を羊が埋め尽くしてね……うん、掃除がたいへんだった」

「……は？」

兄はそらした視線をそのまますがめ、深く、深く息をついた。

「かわいそうに」

「なにが？」

「いや うん、がんばれ？」

ぼんつと肩に置かれた手が、やけに力強いのが気に掛かった。

まあいい。

どこでどう暮らしていようと、そもそも魔女なる存在にそうそう遭遇することもあるまい。

同じ町にいるといったところで、魔女とはあまり出歩くものではないというし、時には魔物の討伐などで忙しいと言っ。

一介の警備隊長に関わることなどあるまい。

平和で平凡が一番だ。

小さな町で紛争も無いという。

知人には左遷だなどと軽口を叩かれたが、なに、ポテンシャルの問題だ。

ロイズは意気揚々と任地についたし、顔合わせもそつなくすませた。

「こんにちは」

につこりと面前に立つ少女に、無骨な調子で挨拶を返す。

この町の住人は新参のロイズに一々声を掛けてくれるのだ。

立っていたのは赤味の強い金髪の少女だった。

琥珀の瞳が珍しい。光の加減で金とすら思った。

少女、というよりも女性というほうがいいのかもしれないが。体躯の良いロイズより随分と華奢だ。

につこりと微笑み、小首をかしげる。

「あの、警備隊の方、ですよね？」

「ああ」

「あの、そっちのほうに へんな人がいて、あの……一緒に来て

もらえますか？」

不安そうに瞳を揺らし、道の折れたほうを示す。
年若い娘が一人歩きに不安でも抱いたのかもしれない。
うなずいて彼女の前を歩いていき、道を曲がった。

途端　足元にある筈の大地がぽっかりと大きく穴をあけ、何の
タメもなく、落ちた。

「ギッツ」

奇妙な声が口の端から漏れる。

何がどうなったのか判らぬままに、落ちる。

血の気が下がる浮遊感と一緒に、バシャンッと激しい水音が響いた。

「……」

「キヤー」

「やったーっ！」

わらわらと子供達が現れ、穴の上から水浸しのロイズを見下ろし、
その中央　先ほどまで可愛らしくはにかんでいた娘の瞳はイキイ
キと輝いていた。

「チヨロイわ！」

チヨロイって、なんだ。

ぽたぽたと前髪から水が落ちる。

先ほどまで確かにこの穴の中は水で充たされていたというのに、今
は嘘のように水が無い。ただ、ロイズの全身はびしょぬれだった。

何がおこったのか判らない。

ただ、兄の声が耳の中によみがえった。

「かわいそうに」
「いや うん、がんばれ？」

ロイズ・ロックの隊長就任（後書き）

うん、がんばれ。

……ちなみに兄ちゃんは今レイリッシュにこき使われている文官です。
兄ちゃんもがんばれ。

森にて（前書き）

本編があんまりにもジミでつまらなかったんで、こちらに一本追加。

森にて

ブランマーシュの森、と呼ばれる森は元々は違う名前の森だった。勿論、それは魔女が住み着いたから、人々は【ブランマーシュの森】といったの間にか呼ぶようになったのだ。

暗い夜道を蝙蝠がはたと過ぎる。

森にぽっかりと作られた小さな家を前に、蝙蝠はぽんとヒトの形になった。

「おや、おかえり」

その家に今いるのは本来の主ではなく、髪をひつつめた眼鏡の女性だ。

淡い金髪に細身の眼鏡。普段から不機嫌そうにその目は細い。

自然と背筋が伸びて「先生ごめんなさい」と他人に言わせそうな雰囲気を持つ。

「エリイフィアさま、来てたんですか？」

「定期的に来ないことには仕方ない。」

まったく、あの馬鹿娘はいつまでたっても面倒をかけてくれるよ」

呆れた口調そのままに魔女は鼻に掛かる眼鏡のツルを押し上げた。

「昼間のうちに村のやつが来てた。」

子供が熱を出したとかでね、クスリを出しておいた。もし明後日までにまた来るようなら一度見に行くから、あんたも気にかけておいで」

「はい、すみません」

「あんたが謝ることじゃないね。」

悪いのはあの馬鹿娘さ。それに、あの馬鹿娘の尻を拭うのは母であり師である私の仕事だからね」

ふんつと鼻を憤らし、エリィフィアは目を細めた。

「何か言いたそうだね？」

「…………マスターは、このまま体を見つけれないとどうなるんですか？」

「わかってるだろ？」

猫の体に無理に収まってるんだ。魔女の魂をあんな小さな器に入れて、今はその魂を守る為にギリギリの魔力まで与えている。

負荷が掛かりすぎさ　無茶をすれば魂が融合して消え去るか、猫の体が死ぬか、まあ、どちらにしろあの子にとって楽しいことじゃないね」

使い魔の顔が歪む。

「だからといって妙な手出しはするんじゃないよ？」

使い魔の心を察するように、エリィフィアは嘆息交じりにいった。

「あの子はあの子の手で見つけなければならぬ。」

他人が手出しを許されているのは、あの魔導師だけだ。それだって最終的には何の力にもなれないことは判ってるだろ？

おまえが妙な手出しをして全てを台無しにしちまったら　それ

こそ、レイリツシュは最終手段に出るだろうよ」

今回のことは土台レイリツシュにしても私にしても随分と無茶をやってるんだ。

今にも泣き出しそうな使い魔の様子に、ふつとエリィフィアは微笑んだ。

「すまないね」

「 エリイファイ様？」

「あの子が愚かなのは、私の教育が悪かったからさ。
あの子の我儘を許しちまったのは私だからね」

厳しくすればするほど、ブランマージュは反発した。

最終的にエリイファイの手を離れたのだって、家出同然。

それでもブランマージュはレイリツシュに居場所を求めたことだけは褒めてやってもいい。

レイリツシュに甘えてしまったのだ。

大魔女のもとであれば大丈夫だと。

げんに、未熟な娘の為にレイリツシュは平和な小さな町の横にある森へ住むようにと居場所を与えた。

悪意持つ魔物が多くいる場所や、人々が争いを繰り広げるような場所から遠く離れた場所。

年若い幼い娘を、魔女達は愛していた。

その娘がことあるうちに魔女の理ことわりの書すら読んでいないとは！

段々と怒りが沸いてきた。

勉強してないにも程がある。

いいや、勉強はしたはずだ。さらりと表面だけをなで上げて、あげくすっかりとそれを脳内から締め出したに違いない。

「えっと……エリイファイ様？」

ふつつつとした怒りが顔に出たのか、使い魔が怯えたような声を出す。

「どちらにしろ、誰にもどうにもできないさ。

私たちは見守るしかできない」

大きく息をつき、使い魔を眺める。

「あんたも覚悟だけはしておきな」

主を失う覚悟を。

魔女のひたりと冷たい視線を受けて、使い魔はうつむいた。

「ぼくは……ずっと、ずっとマスターと一緒にです」

「そうかい」

難儀な子だね。

そっぴいながら、エリィフィアは慈愛のこもった眼差しで使い魔を見た。

「あの子は幸せモンだよ」

森にて（後書き）

やばいこっちもジミだった。

バレンタイン（再録）

「ロイズ・ロック隊長殿御仕事ごころーさま」

ふふんつと鼻を鳴らし、屋根の上から魔女が言う。

ロイズは一旦それを見上げたが、軽く無視してその脇を抜けた。

「まちなさい、この熊男！」

「近所迷惑だ、ブランマージュ」

「まあ、愛想の無い男ね。

まあいいわ。今日は許してあげる。だって今日はバレンタインですもの」

「だからどうした」

「あら、バレンタインには愛情を込めて花を贈るのよ。

もちろんあたしは寛大だから、熊男からの花だってもらってあげる」
「そんなものは無い」

きっぱりと言うと、ブランマージュはふわりと浮かび、ロイズの前でぷかぷかと浮かぶ。

「つーまーらん」

「ああ、もうつるさい。

今が何時だと思ってるんだ？」

ロイズは夜警の最中だ。

右手に下げたランタンが淡く揺れる。

「エイルも何もくれなかったー」

不満そうな魔女に、嘆息してごそりとポケットに手を入れる。

町で出会う子供達の為にと用意してある菓子。

チョコレートを取り出し、包みをといて、

「これでも食ってろ」

そして寝る。

不満を口にする口の中にほურიこんでやった。

「ふふっ」

ブランマージュは口の中でとろけた甘さに機嫌をなおし、手を伸ばして、もうすでに背中を向けている男の肩を掴み、

耳元に囁いた。

「隊舎裏の馬房の柵、うつかり開けっ放しにしちゃったから、早く
いかないと馬に逃げられるわよ」

「おまえっっ」

「おやすみなさい、ロイズ・ロック隊長殿！
いい夜を！」

ハッピーバレンタイン。

禁忌の味

魔女は力の源という。

それがどういうことであるのか、魔導師は基本的に書物の上でしか知らない。

何故なら、魔女は絶対数が少なく、また調べようにも当人の協力なくして調べることができない。

過去に数名の魔導師が魔女を捕獲したというが、魔力値でいえば魔導師と魔女の値は歴然と違う。

残る書物によれば、魔女とはまったく未知であり人とはまったく違うものである。

人とは異なる、魔女という種。

そう残すものもある。

ためにに幾度かエイル・ベイザツハは魔女に向けて魔道呪文を向けてみた。

魔導師はあらかじめ宝石に魔方陣を記録したり媒体を使用したり、増幅器を使わねばならないことを、魔女は容易くこなす。

このじてんで力量が知れるというものだ。

魔導師には魔女を害することなどできようはずがない。

その魔女が雷撃によって打ち落とされる。

それはエイルにとっても衝撃の場面であった。

じっさい、あの年若い魔女は未熟だ。

魔女は何でもできると過信して、学ぶということを知らない。魔道書や禁忌の書の類でさえ見ていないのではないかと思う。

その魔女だからこそ、そんな攻撃に撃墜されたのだろう。

エイル・ベイザツハは口元に笑みを刻んだ。

魔女を手にいれる。

それは甘い、甘美な誘惑だ。

決してやってはいけないと魔導師であれば皆叩き込まれる。
それは魔導師の禁忌。

魔女を、手に入れる。

その昔、ある魔導師がやったとされる危険な行為。
魔女を手に入れ、その血を飲み、肉すらそぎ落とし食らい
を潰し声を奪い、幾重もの魔道呪文の鎖で繋いだ。

喉

純粹なる魔力。

魔道具として

腹の底が冷えるような感覚。

魔女を捕らえる。

なんと魅力的な誘いであろうか。

はじめのうちこそ、殺す気など毛頭無かった。だが、途中から呪文
を切り替え殺す気で打ち放った。

絶命まではしない。

動けなくなれば良いのだ。

口が利けなければなおいい。

深い深い地に閉じ込め、幾重にも結界を重ね。

あの魔導師の失態は、魔女の力を使おうとしたからばれたのだ。
ならば私は使わなくとも良い。

おのれの探求に全てを尽くすだけでよい。

魔女を、この手で。

堕ちた魔女の全てをこの手で暴く

それは………儚い、夢想。

腹の奥深い、とろとろと流れる 浮かんでは、消え、そして浮かぶ。

うたかたの、

「ああ、あたしにごようかしら、ダーリン？」

好奇心の強い金の瞳。

琥珀の眼差しが光を受けて金色に瞬く。

気の強い口元が笑みを刻みつけ、こちらの反応をつかがつのは怒らせようという算段だ。

愚かな魔女、ブランマージュ。

魔女の血に、肉に、力があるのだろうか。

それは何かを変えうる力であるのだろうか。

禁忌は、どのような味をしているのだろうか。

「いいや」

口もとに笑みが浮かぶ。

おまえの味を知りたいのだと、言えばおまえはどのような顔

をするのだろう。

禁忌の味（後書き）

地雷踏んだ気がするのはどうしてでしょうか……

戯れ（前書き）

本編がきつかったので、仕事の合間に仲良しな二人が書きたくなつて衝動的に書き上げてしまいました。
それでもやっぱり二人のコンビが好き。

戯れ

ロイズがくつきりと眉間に皺を寄せ、その奇妙な瓶を眺めていた。じつと睨みつけ、腕を組んで、難しい顔をして。

その時のあたしはそれを興味深々で見ていた。

一瞬ロイズってば病気かしらって思ったのだけれど、何か違うのよ。難しい顔をして、あたしと薬とを見ている。

それから大きく溜息を吐き出して「まあいいか」と呟いた。

「で、コレがその薬です！」

あたしはふふーんつと鼻を鳴らしてエイルの前にその問題の小瓶を閃かせた。

中身は液体ではなくて粉末です。少し茶色い。

「で？」

ノリが悪いわよ、ダーリン！

「ダーリンは薬とかくわしいでしょ？」

「おまえもそうだろう」

淡々と言いながらあまり興味を向けてくれないエイルだ。

その手はずつと何事かを書き記している。

「ふふふ、あたしはあ、ちょっとこのテの薬は判らないのよおん」

「なんだその言い方は」

「きつと媚薬とか、精力剤だと思うのよ！」

チツ、無言になったわね、ダーリン。

「ってコトで、ちょっと調べてみてよ」

「なんで私がそんなことを」

「ふふふ、隊長殿の弱みを握ってやるのよ。絶対にあとあと役に立つわよっ。」

どうする、この薬がものすごい薬だったり、はたまた惚れ薬とかだったりしたらものすごく楽しいと思わない？」

ロイズってばどういう顔してこんなもの買ったと思う？

もう想像するだけでお腹よじれちゃいそうなんだけど！

「少しも楽しくないが」

ノリが悪すぎますよ、エイル。

あなたは本当に立派な成人男子ですか？

そんな貴方だからこそ！

あたしはにまーんつと口元を歪め、きゅぽんつと問題の薬瓶の蓋を開けはなった。

「こうしてくれるううう」

「なっ、この戯けがっ」

半分くらいばさりとエイルに掛けてやる。

あ、もしかして飲み薬？

それだと駄目か？

あたし失敗？ なんなら口の中に無理矢理押し込んで……

「ブランマージュ？」

エイルが瞳を眇めた。

「おい？」

「なんか……いいにおーい」

あたしはふにやりと体の力が抜けた。

尻尾がぱたぱたと自然と揺れて、なんとなく体が低くなる。

むしように体を何かに摺り寄せたくて、そう、いい匂いのするエイルにすりすりとすりよった。

「エイルう、なんかいいにおーい」

なんか凄いスキーっ。

すっごいスリスリしたい。

いやぁん、スキーっ。

エイルはくつきりと眉間に皺を寄せ、残った薬瓶を引っつかみ、

「媚薬……？ いや」

「またたびか」

いやそうに呟いた。

あああ、エイルがいいにいいい。

「私の服に涎よだれをたらすな。

噛み付くなっ、舐めるんじゃないっ！

戯たわけ！」

エイルはうんざりとした様子でその後あたしを風呂に叩き落した。

……反省してます。はい。

戯れ（後書き）

なんだかんだ言っ
て仲良しです。

愚か者

いろいろと思い出したくない。

あたしは不機嫌だった。

それは当然だ。

理由は簡単、ロイズのあんぽんたんが意味ありげに持ち込んだ【またたび】、あたしはね、あれはきつと超強力な媚薬とか精力剤だと思ったのよ。

だからあ、不機嫌なエイルの恥ずかしい痴態　なんかいやらしいを笑ってやろうと思ったのよ。それと同時にロイズがこんなものを持っていた事実を後々の切り札にしようという、なんとも御得なセツトを楽しもうと思ったのに。

現実には【またたび】

恥ずかしいことをしてかしたのはあたしってどういうことよ。

あのエイルにすりすりしちやっただじゃない。

噛み付いたり舐めたりしちやっただわよ！

覚えてるこの記憶を取り出したい！！

エイルはあたしの襟首を掴み上げ、そのまま浴室のバスタブに放り込んだ。

「愚か者！」

って、こうして思い出してるしね、あたし！

ふんつとロイズの邸宅、居間のソファで不機嫌になっているあたしの前でロイズ当人は首をかしげている。

「エリサ、ここにあった小瓶知らないか？」

ケツ、無いわよ。

捨ててやったわよ。

そもそも、あんなものあんだとうするつもりだったのよ。

「まあ、いいか」

大雑把な性格の熊男は呟き、ソファにいるあたしをひょいっと持ち上げていつも通り膝に置いた。

「ほら」

ふいにポケットから妙な棒を出す。

つんつんつと鼻先で動かされ、あたしは眇めた視線でそれを見た。
じやれろって……

「何ですか、それ？」

「またたびの木。うちの所長が猫もストレス発散させないと駄目だ
って言うからな。

粉ももらったんだが 無くしたようだ」

二人の会話がどこか遠い。

あたしはとろりと酒を呑んだ時のように酩酊感を覚え、自然と口元
が緩んでしまう。

「ふにやうう」

あああ、スキー。

この匂いスキー。

我慢できないいいい。

細い枝に一生懸命体をこすり付ける。

腰碎けるうう。

ハムハムしたい。

はううう。

立ってられないよおお。

「……」

「凄い酔っ払ってますね」

「……」

膝の上ででろでろになって枝に身をもだえている猫を見て、ロイズはおもむろにその枝を取り上げ、ゴミ入れに放り込む。

「若様？」

「いや、うん……オレはもう駄目かもしれん」

「はい？ え？」

ロイズは鎮痛な様子で子猫を抱き上げると、まだ酔っ払ったようになっではうはうと自分の指を噛むソレを風呂場に運んだ。

愚か者（後書き）

【またたび】ロイズバージョン

愚か者は私かああああ。

何書いてるんだっ。ロイズがどんどん壊れてく（笑）

ちなみに使い魔バージョンは書きません。

想像したのが人間バージョンだったから……二人みたいに風呂場に叩き込んだりしないと思うのよ、うん。

クエイドと猫（前書き）

突発思いつきネタ。

クエイドと猫

「あれ、また猫連れて来たのか？」

警備隊隊舎 第二隊室の壁沿いに作られている腰の低さの物置の上、白い猫が寝ている。

遅刻ギリギリで隊舎に入ったクエイドは苦笑しながら猫の頭を撫でた。

その猫はもう幾度か見たことがある。

警備隊第二隊隊長、ロイズ・ロツクの飼い猫だ。

首と胴体を交差させた紐でくくられている。この紐は仕事上でも良く使われる品物で、捕り物などに便利な魔道具の一つだ。

囚われれば紐をつけたものにしか外せない。

そこまでしなくても、と思わず笑いが漏れた。

「隊長は？」

「所長のトコですよ」

部下の言葉にふーんと鼻を鳴らして応え、猫をひょいっと持ち上げてみる。

「なううう」

イヤそうだ。

じたばたとあばれているが、勿論子猫が暴れたところで何がどうなるものではない。

「今日はどうして連れて来られたんだ？」

「さあ、なんか所長が連れて来いって言ってたらしいですよ」

なんだろうねえ、とクエイドは言いながら猫の首の下を撫でてやる。

「みゃう」

「お、気持ちいいかあ？」

クエイドは毛のある生き物は全般的に好きだ。飼うまではしない。生き物に対して責任をもてないからだ。だから見かければ構うが、基本的にはそれだけだ。

物置にくくられている紐は長い為、近くのソファに座って膝の上に猫を乗せる。

手入れのいきとどいた猫の手触りが気持ちいい。

持ち上げて匂いをかけば、石鹼の良い香りが漂う。

「しつかしさあ、うちの隊長と猫って組み合わせがすごいよな？」

「もともと隊長は面倒見がいいですよ」

「まーなあ。でも、どっちかつつと隊長は犬派にみえねえ？ つかい犬を従えてるかんじ」

「ですなえ」

膝の上の猫がクエイドの指をがじかじとかじる。

噛み癖があるのかもしれない。

小さな歯はちつとも痛くないが。

「躰がなつてないぞ」

と、かみついてくる猫の顎をぐつと掴んで口の中に指を突っ込む。

あがあがと慌てるさまが面白い。

「きひひひひ、苛めちゃうぞお」

猫の扱いなら任せろ！

妙な自信を込めてにやりと笑い、膝の上に立たせるようにして両手を掴み、肉球をぷにぷにと親指で押してみる。

「みやうううっ」

「ふふふ、いやだろお」

猫が必死に身をよじって逃れようとするが、勿論そうはいかない。
なんだか猫の癖に泣きそうな顔をしている。

「つづいてはお腹わしゃわしゃだぞー、我慢できなくなっちゃうぞー」

白くて丸い可愛いお腹に手を掛けてわしゃわしゃと動かすと、必死に猫キックを繰り返してくる。

小さな足で蹴られたところで何ら実害は無し。

「ふしゅーっ」

「くくく、尻尾がおつきくなっちゃってかわいいなあ」
興奮のあまり尻尾が空気をはらんでふくれた。

子猫は必死に抵抗するも撃沈。

室内のそこかしこで副隊長の暴拳に含み笑いや呆れたような笑いがおこるが、クエイドはすでに興が乗っている為止まらない。

耳をひっぱり、鬚をひっぱり、中指と人差し指の間で猫の小さな舌を挟んで爆笑する。

確実に猫に嫌われるタイプである。

だが当人は可愛がっていると思っているか、それとも苛めている自覚があるのか、口から「きひひひひい」と奇怪な声を漏らす。

「知ってるかあい子猫ちゃあん、にゃんこの性感帯は尻尾の付け根え」

「何をしているんだ!」

突然力いっぱい頭を殴られた。

「うちの子に触るな!」

いつの間に戻ったのか、ロイズ・ロックがクエイドの膝の上の猫をひったくり、猫もやっと現れた主に必死にしがみつく。

「みゃう、みゃうううっ」

その声がはげしく哀れだ。

「ううう、痛い。」

ひどいっすよ隊長。ちよつとした御茶目じゃないですか」

「おまえは二度と触るな、近づくな」

「いや、そんなマジな目しないで下さいよ？」

その目で外を行けばモーセの如く人々は道をあけますよ？
慣れているといえどほんの少し汗まで流れた。

ロイズ・ロックは自分の胸にしがみついて涙目になっている猫の頭を撫でて、

「っどいつもこいつも」

と不機嫌をあらわにしている。

「そもそも、今回はどうしたんですか、猫連れてきて」

「所長が連れて来いというから連れてきたら」

忌々しそくに舌打ちする。

「倉庫にネズミがでるから猫を入れておけとかふざけたことを。あのタヌキ親父が」

「……いいじゃないですか」

猫なんてそんなものだ。

猫を飼う理由の一番がネズミ避けなのだから。

ある意味しごくまっとうといえる。

「ネズミなんて食べて病気になったらどうする」

ネズミ捕りをさせたいなら自分の家の猫を使い！といきまく相手に、

「いや、あの倉庫だったらすでに所長の猫が一匹入れられてるでしょ」

黒いのが。

クエイドが苦笑しながら言えば、益々もってロイズは不機嫌そうに

クエイドを睨んだ。

「完全に駄目じゃないか！」

なんで駄目なのか、その原因はクエイドには理解できなかったが、とりあえず一つだけ判ったことがある。

我らが隊長殿は極度の猫フェチに違いない。

クエイドと猫（後書き）

クエイドは動物が大好きですが、動物はクエイドが嫌いです。

迷子の子猫

「事件です!」

クエイドはその剣幕に恐れをなした。

「えっと……はい?」

「クエイドさんっ、大変なんですっ」

エプロン姿の女性の姿に、クエイドは見巡り中の足を止めた。

栗色のゆるいウェーブのかかる髪を三つ編みに結び上げ、頭の上の方でとめている侍女服のその女性は、彼の上官の家の使用人であることは承知している。

「いないんです!」

「え、ああ……連絡はした筈なんすけどねえ。いれちがったかな」
やつと納得する。

「隊長なら宮廷魔女の……なんつつたかな、ああ、レイリツシユ様?に拉致られちゃいましたね。なんか数日貸し出されていきましたよ?」

不憫すよねえ。

のほほんと言いながら肩をすくめる。

あのときのことを思い出すと笑ってしまふ。

隊舎の執務机に向かっていたロイズ・ロツクの後ろに突然魔女が出現したと思うと、彼女はロイズの襟首を掴み上げ、

「はい、これ!」

と、くるりと巻かれた羊皮紙なんぞを突き出した。

ロイズは目を見開いていたが、慌ててその巻紙を開いて内容を確認。しかし魔女はいええ、啞然としている彼の部下一同を舐めるように見やり、につこりと微笑んだ。

「しばらくコレ借りておくから、ちゃんと上の人にも言うておくから」

言いたいことを言い切り、

「じゃあっ」

という言葉と共に

我等が隊長殿は空間転移の巻き添えを食った。

完全な拉致だった。

魔女は完全犯罪が可能だ。

「若様じゃありません！」

侍女殿はぶんぶんと首をふり、

泣きそうな声で言う。

「猫です」

「はい？」

「うちの猫しりませんかっ」

「いや、知らないスよ」

「いないんです。屋敷中を探したのに、いないんです。うちの犬にも見つけれないみたいでっ」

ぐわしと上着をつかまれてクエイドは引きつった。

「どうしましょうっ」

「いや、猫なんてすぐ帰ってくるでしょ？」

あの白い猫ですよね？ ああ……えっと」

そういえば名前を聞いたことがない。

「はい、うちのブランちゃん」

「ブラン……ちゃん？」

「ブランマージュという名前なんです」

それは探していいんだろうか。

頭の中で一場面が展開する。どうせ隊舎の中には暇な人間が山とい
る。元々平和を描いたような場所だ、猫を探して来いといえば「め
んどくせー」と言いつつも、何かのついでに第二隊の人間たちは動
いてくれるだろう。

「で、名前は？」

「ブランマージュ」

場が凍りつくこと確定だ。

何故あの猫の名前がブランマージュなのだ。よりにもよって、ブランマージュ。

それは警備隊の人間達にとって最も忌まわしき名ではないか。

「もしかして隊長、可愛がっているフリして結構猫を相手にストレス発散？ いじめてるとか？」

思わずぼそりと言葉が口から落ちた。

途端に侍女の目がカツと見開かれた。

「そんな訳ないじゃないですかっ！」

若様はそれはそれはブランちゃんを可愛がってるんですよ！ いつも御風呂にだって一緒に入ってるし、寝る時だって一緒なんです。ブランちゃんがくしゃみでもしたら大騒ぎなんです！ うちの若様はブランちゃんを苛めたりなんてしてませんっ」

「……」

「そのブランちゃんが若様の居ない時に家出なんて。私、私どうしたらいいかっ」

「……」

「聞いてますか？」

ギッと睨まれ、クエイドは乾いた笑いを浮かべてしまった。

「聞いてます。あの、ですね オレが探しますから、とりあえず猫のコトは任せて下さい。おたくさんは自宅でのんびりと待って。できればその話は一切しない方向で」

「为什么呢？」

「いや、うん」

隊長の男としての何かが完全粉碎されそうだから。

もし強制出張から帰宅してこの話が町中に広まっていたらと思うと恐ろしい。同じ男として！

自分ならば立ち直れない。

猫と風呂に入り猫と寝る……挙句その猫の名前がブランマージュ。隊長、不憫すぎる。

「とにかく、猫なんてすぐに出てきますって。確かあの猫ってば魔道具の首輪してましたよね？ 最悪魔道師に頼めばすぐに見つかりますから、あんたは少し落ち着いて自宅で待っててくださいよ。隊長が戻ってくる頃までにはなんとかしますから」

余計なことは一切言わずに！

宥めてすかして自宅まで送り届け、クエイドはがしがしと頭をかい

とりあえず凄いネタみつけ。

いやいやいや、このネタは自分の首も絞めるかもしれない。保留。もしくは封印しておこう。

クエイドは保身もできる完璧な男であった。

迷子の子猫（後書き）

言っちゃ駄目だゝ（笑）

留守番

「まったく、しめっばい子だね」

呆れたようなエリィフィアの言葉に、使い魔であるシュオンは更に溜息を吐き出した。

その手には黒いサテンの生地。

愛する主の為に今日もせつせと縫い物に興じている。

「行けばよかったじゃないか」

使い魔の主は現在始原の森という場所に派遣されている。容易く行ける場所ではないため、居残りの使い魔にとっては辛い。

行けばよかった。

行けるものならそうしたい。

だが、阻むものがあつた。

心が。

「だって、ぼく魔道師の姿なんです」

しゅんつと肩が落ちる。

「それが？」

「魔道師の姿だから、魔道師と一緒にと人形ひとがたの姿に変化できないんです。怒るから」

「別に蝙蝠でもいいじゃないか」

「……蝙蝠だと、もっと役立たずじゃないですかー」

蝙蝠は自分が役立たずな使い魔だと熟知している。

できることといえば、家事と人の形がとれること。家事だって、プランの為に必死に覚えたものだ。

簡単な魔法だって……本当に簡単なものしかできない。

一族の中でもつまはじきだった程なのだ。

「それに、魔道師だけならともかく 警備隊長も一緒だってレイ

リッシュ様が言っていたから」
声のトーンと視線が落ちる。

「ぼく……あの人嫌いだから」

エイルは勿論キライだ。

だが ロイズへ向けるキライは、日々でかくなる。

「なんだい？」

「……」

縫い物をする手が止まる。

自分をうかがうエリィフィアの言葉に、言葉が濁る。

「……マスターが」

「あの莫迦娘が？」

「最近、ロイズさんの邸宅のことを、うちって、言っんです」
「は？」

「ご飯、うちで食べる。」

その言葉は、きっと無意識から出ている。

うちに帰る。

うちの人。

……あんな言葉は聞きたくない。

マスターの自宅はこの森にある小さな家。

うちと称されるのはソコハズの、うちの人と言われるべきは自分のハズで。

「マスターは、ぼくの」

エリィフィアが呆れたように大きく溜息を吐き出す。

今にも泣きそうな使い魔の頭を乱暴にがしとかき混ぜ、

「まったく本当に難儀な子だね。」

レイリツシュに相談してやろうかい？ あたし一人では無理でも、レイリツシュも加わればあんたの歪められた魔法を解くことが」

「駄目です！駄目っ」

「蝙蝠？」

「……駄目です。イヤだけど……絶対にイヤだけど、これがぼくとマスターの最後の魔法かもしれない。それなら、解いては駄目ですっ」

切羽詰るように言う青年に、更にエリイフィアの溜息は深くなる。

「本当に、あんたは」

溜息を落とした頬が歪み、口元に笑みを刻む。

「あんた程いい使い魔はいないさ」

その言葉に、部屋の片隅で自分の羽根の手入れをしていた白いオウム

ム エリイフィアの使い魔が抗議するように鳴いた。

警備隊第一隊が魔女の被害にあわない理由

「理不尽だ」

始末書の束の前に、ロイズ・ロツクは低く唸った。

「まあまあ、落ち着いて」

「これがおちついていられるか。何故、あの魔女の被害がうちの隊にばかり集中しているんだ」

ロイズ・ロツク、任地について一年と半分。

日々下らない魔女との追いかけっこに銃を抜いた数が二桁　それも全て始末書が証明している。

「あー、そりゃ……」

ロイズの隊の副隊長であるクエイドは苦笑して頭をかいた。

「第一隊にはギャンツさんがいるから」

「は？」

ギャンツ・テイラーの名前は勿論知っている。第一隊の隊長だ。

会議などで顔を良く合わせる相手でもある。生真面目で温厚。理想的な上司というところだろう。

「あの人が何だ？」

「……オレが言うよりも、自分で確かめたほうが早いですよ。あの人の前で魔女殿の話題をふってみて下さいよ」

クエイドは苦笑し、肩をすくめた。

眉間に皺を刻みつつ、それでも魔女対策を知りたいロイズは部下の言葉に従い第一隊の隊長であるギャンツを馬屋で捕まえた。

「ギャンツ隊長」

「ああ、ロツクか。何か用かい？」

愛馬の腹にブラシを掛けていた男が柔らかな笑みを浮かべて尋ねてくる。

爽やかで柔らかな物腰。いつ見てもこの相手は素晴らしい上司の鏡

である。ロイズにとっても目標だ。

ロイズは「すみません」と前置きし、

「ブランマーシュの……」と言葉が続けた。

途端、ギャンツはぐるりと梟の^{ふくろう}ように首をめぐらせ、瞳を見開き、ブラシを強く握りこんだままロイズのシャツをつかみあげた。

「ブランマーシュが何だと？」

「

「どこだ？ どこにいるんだ？ 最近はずっともお会いしていない、おまえは何を知っているんだ！」

ざーっと血の気が引いた。

強い力でがんがんと揺らされる。

「私のブランマーシュはいつたいどこにいるんだーつつ」

「ってコトで、魔女殿は第一隊の前には怯えて出てこないんですよ」

「

「隊長？」

「オレの、オレの理想の上司が……」

襟首を締め上げられ、がくがくと揺らされたロイズは頭を抱えてしばらくぶつぶつと呟き続けるはめになった。

「ブランマーシュ！ 私の天使。私を激しく罵^{ののし}ってくれ。私の何がイヤなんだっ」

耳の奥で木霊する呪いの言葉をなんとかしてくれ。

警備隊第一隊が魔女の被害にあわない理由（後書き）

何故第二隊ばかりなのか！ その理由はブランが怯えているからでした。元々はギャンツさんは素晴らしい人でしたが、ブランの悪さが講じて蹴りを一発御見舞いしてしまったところ、どうやらギャンツさんの何かのスイッチが入った模様。普段のギャンツさんはいい人です。

魔女の罠？

「おや、久しぶり」

クエイドは片眉を跳ね上げるようにして皮肉な笑みを浮かべた。

「あら、副隊長」

とはブランマージュ。

「また悪さを企んでるのかな？」

「そんなことはないわよ？」

と笑うその口元は実に嬉しそうにゆがんでいる。何かを確実に企んでいるのだらう。

クエイドはちらりと背後を確認し、ちょいちょい指先でブランマージュを招いた。

「ちよつと」

「なあに？」

「あのね」

すすすつと身を寄せてくる魔女ににつこりと笑い、腰にある白い魔道用のロープで手早くその手首を戒める。

「なにすんのっ」

「ギャンツ隊長！ こっちにブランいますよーっ」

言った途端にブランマージュが暴れた。自分を捕らえた魔道具をぐいぐいひくが、引けば引くほど絞まるのだと教えたほうがいいだらうか？

「いやっ、やだっ、離してっ」

そんな魔道具など魔女ならばすぐに解くことができそうだというのに、パニックを起こした魔女は半泣きの瞳でロープを解こうとしている。

「ブランはどこだった？」

先ほど道端ですれ違ったギャンツが足音も高く近づいてくる。

クエイドは自分の隣でもがいている魔女の姿に顔をしかめ、ぐ

つと抱き込むようにして近くの建物の隙間に入り込み、ブランマー
ジユの口を塞いだ。

「ふっ、んんっ」

「ごめんね。悪かった　静かにしておいで」
ほんの意趣返しのもりだった。

ブランマージユがギャンツを苦手としているのは周知のことである
から。悪さばかりするブランマージユを多少懲らしめてやろうと思
ったのだが。

泣かせる気は無かった。

腕の中で涙交じりで震えている魔女に、途方にくれてしまう。

いつだったか、ギャンツに捕まりそうになって腰を抜かしたことも
あったっけ。

相当ギャンツが怖いのだろう　完全に怯えている。

狭い場で左肩を壁に触れさせ、腕の中でふるえる魔女を宥めるよう
に苦笑を落とす。

「ほら、じつとして。ロープといてやるから」

「ふえっ」

まだ涙声しかでないようだ。

参った　悪いことをした気になるじゃないか。

嘆息していると、ふいに背後から声がかけられた。

「クエイドか？　そんなところで何をしている？」

「……」

「勤務時間内に女を暗がり連れ込んで　」

「あ、ロイズ」

相手にはクエイドの背中と、そしてもう一人の影があることしか
見えていないだろう。

しかし、今小さくブランマージユが呟いた言葉をあの地獄耳は聞き
入れただろうか？

だらだらといやな汗が流れる。

腕の中には半泣きの魔女。

その手は捕縛用のロープに囚われている。

……もしかして史上最大のピンチですか、オレ？

御礼多謝！（イラスト入り小話）

「たまには外に出してあげないと可哀想ですよ！」

ロイズの休暇、寝椅子に座り銃の手入れをしていたロイズに侍女が言った。

「外は危ないだろう」

「だったら若様が見ていて差し上げたらいいじゃありませんか」

ロイズは眉を潜め、寝椅子の端で香箱座りのあたしをちらりを見ると、観念した様子で銃をテーブルへと戻した。

「庭先ならいいか」

その手が伸びてあたしを抱き上げる。

別にね、外なんてどうでもいいのよ。あんたが仕事の時は毎日あたしは外に行ってるから。

太陽と仲良くしたい質タチでもないしね。

> i 5 8 6 9 — 9 6 2 <

まあ、たまにはあんたに付き合ってあげたつていいわよ？

そもそも休日のあんたときたらちつとも外に行かないじゃない？
ちよつとくらいは遊んであげたつていいのよ？

最近のあたしときたら本当に眠くて参つちやう。

猫の習性つてヤツなのかしらね。

どこにいても眠れるし、ちよつとやそつとじゃ起きない感じ。

寝椅子でくつたりと体を沈めるあたしを、誰かの手がそつと持ち上げる。

柔らかくてあつたかい場所……気持ちいい。

深い場所にとろとろと落ちていく。

心臓の音が伝わって、安堵感が広がっていく。
あたしはすうっと深い眠りに落ちていく。

誰か知らないけど、おやすみなさい。

> i 5 8 7 0 — 9 6 2 <

イラストを頂きました！

猫ブランとロイズ、そしてチビ魔女ブランとエイルです！

あんまり有頂天でさくさくupしちゃいます。

尚、小話は後付けですので、イラストを損なってしまっているかもしれないません。

すみません。

サイト【納豆に青じる】<http://nattoniaojir>

u.web.fc2.com/のアサゲ様より頂きました。

サイト上にもupされていらっやいます。

アサゲ様、この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

尚、もし他にイラストをかいて下さる方がいらっやいましたらご連絡下さいね。

ちなみに私の方向性として ノーマルでお願いします。

web拍手お礼小話つめつめ(1)(前書き)

もうすでに読んでいる方もいると思いますが、web拍手の小話詰め込みです。

*期間限定だったエイプリルフルはまたそのうちに。

web拍手お礼小話つめつめ(1)

「きゃー テンションあがるわっ」

「ブランうるさい」

「だってエイル！ 拍手してもらったのよ、あんたもお礼言っときなさい」

「……」

「やあね、うちのダーリンってば照れ屋さんでごめんねえ」

「……」

「でもちゃんと嬉しいのよ、コレでも」

「ブラン」

「なに？」

「おまえの年齢を言っただけいいか？」

「あんたよりは年下よ……！」

「あたしね、あんたに言いたいことがあったのよ！」
常々ずつとね。

あたしはロイズ・ロックと視線を合わせ、真面目な口調で切り出した。

ロイズが少し驚いたように身を引きながら、それでもちゃんとあたしを見る。

こちらの真剣さがきつと伝わったに違いない。

「なんだ？」

少し上ずったような口調。

あたしは少しだけ、そう、ほんの少しだけ悩んで、けれど思い切っ

て告げた。

「あんた絶対にハゲると思うの」

「……」

「家族はどうなの？ 父親やおじいちゃんは？ ねえ」
「どうなのよ？」

「言いたいことはそれだけか？」

あれ？なんで怒るのよ？

あたし本気で心配してるのよ！？

「ふふ、可愛い」

白い猫が身を丸めてソファで眠る。

もう見慣れたその光景。

見ているだけで心がなごんで自然と笑みが浮かんでしまう。

「ブランちゃん」

頭を撫でてやると、ごろごろと気持ちよさそうに喉を鳴らす。

最近は昼間のうちにどこか気に入りの場所を見つけたのか姿を見せない。
けれど夕方を過ぎる頃にはいつの間にかソファの上で眠っているのだ。

「若様がこんなに猫好きになるとは思わなかったけれど」
思わず苦笑がもれる。

猫に構うよりも自身の結婚のことについてもっと身を入れてもらいたいと切実に思うのだが……

「……なんか無理そうよねえ」

猫にブランマージュなんてつけてる時点で駄目だわ。

「みゃう？」

「重ね合わせてるのみえみえなんだもの。困っちゃうわね？」

「にゃ？」

「ふふ、おまえは悪くないわよー？」

「マスター」

「なに？」

「拍手してもらえましたー」

「うんうん、お礼言っておきなさい」

「嬉しいです、ありがとうございます！」

「どれくらい嬉しいかって言うと、マスターの入ったあとの御風呂に入った時くらい嬉しいです！」

「……」

「あ、それともマスターの使ったXXをこっそりXXした時かも」

「いやいや、もしかしたら」

「あ、ロイズ？ 悪いんだけどあんたの銃貸してくんない？」

「呼びつけてごめんなさいね？」

漆黒の魔女は唇を歪めて微笑んだ。

「その後どうかしら？」

楽しそうな眼差しに晒され、呼び出されたものは萎縮したように視線を下げた。

「ええ、それは知ってるわよ？」

可愛い子猫は毛を逆立てて御仕事に励んでる」

くすりと笑みがこぼれた。

「でも、大事なものはそれではないでしょう？
それはあくまでもおまけ。

このままではあの子猫は本当に猫になってしまっわよ？」

ふふふ。

「怒っているのね？

でもこれもまた罰なのよ。仕方ないわね？」

漆黒の魔女は艶やかな髪に指をからめ、そつと自らの唇に寄せた。

「早く体が見つかるといいわね？

ふふふ、駄目よ。ヒントはあげない。

でも時間はそんなにないのよ？ このまま猫の体に留めおくことも、
難しい。だって、あの魂は魔力があるのですもの。

そんなものにずっと猫の体が堪えられるなんて、それは無理」

「あたくし達魔女は力あるもの。

だからこそ、根底にある秩序を守らねばならない。

これは特別な処置なのよ？

あの子は特別 何が特別か？ それくらいは教えてさしあげて
もよくてよ？」

漆黒の魔女は実に楽しそうに笑い、

「魔女ブランマージュが年若く、そして愚かだということよ」
と続けた。

ブランマージュがソファで寝るのはいつものことだ。
だが、いつもと違うのはそれが猫の姿であるから。

「……」

エイル・ベイザツハは灰黒の瞳を半眼に伏せ、白い猫を見下ろした。
蝙蝠はまだいない。あれは時折姿を消しては夕方に戻り、猫に変化したブランをロイズ・ロックの邸宅へと運ぶのだ。

エイルの手がすつと白い猫の体毛に触れる。

手入れの行き届いた毛並みは柔らかく艶やかに指先に伝わる。

「」

寝ぼけた猫がほんの少し顔をあげ、するりと指先に顔を押し付ける。
それに少しでも動揺を見せたエイルだが、次の瞬間、
猫に指先を噛まれた。

「っ」

「この肉まずいーっ」

むにゃむちゃという猫をおもむろに摘み上げ、エイルはくず入れの中に放り込んだ。

「なんでマスターゴミ箱で寝てるんですかあ」

「知らないわよっ」

「ここだけの話しなんですが、うちのマスターは実は結構怖がりで

す」

「はい。何かの拍子でアンデットとか見てしまうと、寝れなくなっちゃうんです」

「魔物とかは結構平気ですけど、幽霊とか溶けてる系とかの類が駄目なんです」

「夜寝る前に、ちよろつと幽霊の話しなると、決まって夜は寝れないんですよ」

「だからそういう時は、しばらくこつそりと眺めるんです」

「寝台で枕を抱きしめて寝返りを何度もうって、眉を寄せて布団の中に潜り込んだりして」

「堪えられなくなつてぼくを呼んでくれるのを待つんです」

「朝までマスターの頭をずっと撫でてあげるんですよ、ぼく夜行性だからそういうの平気なんです」

これは滅ぼしてしまったたぼうがいんじゃないだろうか？

ロイズ・ロックは腰の短銃をそつと撫でた。

「たいへんよロイズ！」

「……」

「なによ、ノリが悪いわね？」

「おまえのタイヘンだとかは信用ならない」

「ロクなことがない」

「いやいや、こんかいはタイヘンなのよ！」
あたしはぐぐつと拳を強く握り締めた。

「web拍手を設置して判った大事件よ！」

「なんだ？」

「あんた人気ない！」

「……」

「エイル大人気！ しかもあたしなんて可愛いとか言われてるわっ。いやん、あたしってば可愛い！」

あら？

ロイズさん？

大きな体で隅っちょにいつたって見えてますよ？ あんたでかいんだから。

ろーいずさーん？

「あ、ちゃんと一人いたよ？ ロイズ派って人が」

あああ、なんか更に落ち込んだ？

あまりにも実質的な人数だったか。

「んー？

ロイズは猫フェチで熊男で将来ハゲ確定だけどいいヤツよ？

あたしが保障するから」

「おまえがそーいうことを言うからだろうが！

それにオレの身内にハゲはいない！ 今だってハゲてないっ」

って、それはそれでハゲの人に失礼よ。世の中にはダンディなハゲがいるのよ。

「おまえがろくでもないことを垂れ流しているのが悪い！」

ええええええ？ あたしのせい？

あたしのせいなの？

「うつ」

隊舎の倉庫をあけてロイズ・ロックは呟いた。

黒い猫が「なー」と鳴く。

「ああ、所長のトコのコでしょ」

副隊長が呑気に言いながら猫の頭を撫でる。

「まだネズミ捕りさせられてんのかー？」

「……」

ひょいっと抱き上げ、ずいっとロイズへと向けた。

「隊長猫好きでしょ」

「」

「ああ、こいつオスなんだ」

ひょいっとのぞきこみ雌雄を判別すると、副隊長は嬉しそうに言う。

「隊長のトコの猫の御嬢さんにどすか？」

「絶対に駄目だ！」

「……娘を嫁にやる父親スか、あんた」

耳掃除。

エイルに頭から湯をかけられた！

ぐつしよりと濡れたのは何も髪だけではない。

「いやー、耳の中水うつ」

猫の耳の中に水分をいれるとは何事だ！　なんかヘン、なんかおかしい。すんごい違和感。

うわー、エイルの馬鹿あ。

「どうした？」

黙々と銃の手入れをしていたロイズが眉間に皺を刻む。

エイルは現在あたしと交替で入浴タイムだが、ああ、むかつく！

「猫耳の中に水が入った！　なんかもわーんってするっ」

「……だから、どうなってるんだその耳」

呆れたように言うが、そんなのこっちが知りたいよ。

あたしだって好きで猫耳なんてつけてるんじゃないんだよ。不可抗力なんだ。抵抗できるものであればとつくの昔にどうにかしている。

「見てやるから、来い」

とんとんと膝の上を示される。あたしは溜息を吐き出してその膝に座った。

「こら、耳を伏せるな。伏せてたら見れないだろ？」

「だからソレは勝手に動くのよっ」

あたしの意味で動かすというよりも、こっちの意思とは無関係に動く割合のほうが強い。使い魔に言わせると、あたしの気持ちで伏せたり立ったりするらしいが、それは完全なる無意識だ。

「右か？ 左か？」

「左」

ぐいつと耳が引かれて無理矢理起こされる。

掴まれるとあたしは微妙な気持ちになって身をすばめた。

「しめってる」

「耳元で喋るな！」

「ああ、やっぱコレは耳なんだ……おまえ本当にどんな創りしてんだ？」

しらないってば。

「そういえば、エイルの実験体にされているって噂もあつたな……まさか」

「いやいや、それはないから」

「そうか。良かった」

言いながらロイズが耳の中にふつと息を吹き込んだ。

「ふぎやうつ」

「耳通ったか？」

「まだだよ！ このバカー」

「そうか んじゃ、拭う？」

自分の言葉に疑問符をつけて、やれやれと人の耳を拭おうとしたとハンカチを突っ込んでくる。

「ぬおうっ」

「あ、痛かったか？」

いがいに繊細なのだよ、その耳。

「そもそもなんで猫耳なんだよ」

いや、それは突っ込まないでよ。

そこは突っ込んでんじゃ駄目なトコだからさ。

「白いし」

「……」

「ああ、うちの猫も白いな」

いやあ、その話題は駄目だつて。

まずいですよ。

えっと、えっと。違う話題に転化、転化させねば。

ふいにロイズがふつと笑う。

「おまえも知ってるだろ。うちの猫」

でた！

猫フェチの猫自慢！

まったく猫好きってヤツは、自分の猫を自慢したがるのよ。

辞めてよね！ それをあたしに言うのはとくにっ！

こっばずかしくなっちゃうじゃないのっ。てれてれになっ……

「うちの猫性格悪くてな」

「……は？」

「よく噛み付いてくるし。ひっかいてくるし、本を読んでも邪魔してくるし」

「……」

「人間が食べるものばかり欲しがるし」

……なんだろうね、このフツフツくるものは。

普通はさ、猫フェチっていうのは自分の猫を褒め称えてどれだけ可愛いかを無駄にアピールするものじゃないのか？

褒めろよ。

おまえの可愛い猫を褒めたたえろ。このぼけ熊めっ。

可愛い可愛い白猫ブランマーヂュを褒めなさいよお。こっちが照れて鳥肌たつくらい！

「何か企んでる顔してるしなー」

「……へええ」

「なんかおまえにそっくりだよ」

あたしだよ！

「ほら、もう平気か？」

「」

「ブランマージュ？」

不思議そうに覗き込んでくる男に、あたしはにっこりと微笑み返した。

許すまじ！

猫フェチの分際で！！！！

絶対に報復してやるからな！
覚えてろっ。

web拍手お礼小話つめつめ(2)

「ふふーん。勝った方が相手の言うことを利く！でどうだっ
ということで、ロイズVSブランマージュしりとり大会。」

「当然あたしからです！

りんご」

ふふふ、しりとり、が先だと思ったら大間違いだよん。

「ごはん」

「……はい？」

「ごはん」

「あんた莫迦ですか！？

しりとりはンがついたら負けなのよ、あんた負け！」

「判ったから早く言え。なんでも言うこと利いてやるぞ」

「……」

ものくっそつまらん！！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「勝ったほうが相手の言うことを利く！ しりとり大会第二回！
ということで、エイルVSブランマージュしりとり大会。」

「当然あたしからです！

しりとり」

今回はノーマルに、り、から。

「料理」

おお、エイルってばまともに返答したわね！

偉いぞ。

「りすざる!」

「瑠璃」

……

「り……リップスティック」

「クスリ」

り……

「り、り、リス。さっきはリスザルだから、今度はリス!」

「スリ」

りiiiiiiii

「降参は負けだからな」

腕を組んでニヤリと口角をあげてみせるエイル。

「リボ……じゃなくて、り、り」

リボンも離婚も駄目だあ。

「さて、何をしてもらおうか」

もしかしてピンチか!?

.....

「アン、アンニーナ!」

突然の来訪者であるブランマーシュの声に、寝台からむくりとアンニーナが顔を上げる。

その身にまとうのは薔薇の香りのみ。

顔に張り付く紫の髪をかきあげ、アンニーナはあふりと欠伸を噛み殺した。

「朝早くからなによあ?」

「もう昼近いわよ」

「だあってあたしのホンバンは夜だものお」

「……」

ブランマーシュは引きつりながら、

「あんたに聞きたいことがあるのよ!」
と告げた。

「何よ?」

「言いたくないけど、最近のあたしときたらめっきり悪い魔女として何かが間違ってるのよ」

「ふーん?」

「だから、先輩悪い魔女としてちょっと教えてもらいたいの」

なんというか、悪い魔女としてのコツというか、心得って、いうか? ブランマージュの言葉にあふりと欠伸を噛み殺し、アンニーナは瞳を細めた。

「誰が悪い魔女だって?」

「え?」

「いつとくけど、あたしは善い魔女だから」

「……は?」

ブランマージュは光の角度で金色に見える琥珀の眼差しを見開いた。

「あたしはー、悪い魔女じゃないから」

「……どのへんが善い魔女?」

四六時中色欲にふけりまくり、男に貢がせて好き勝手している魔女が、善い魔女?

「あたしはー、自分の欲望にすなおーな良い魔女なの。」

欲しいものはくれる人から貰うしい。男と遊びたければ遊ぶのー。

あたしはー、判りやすい善い魔女よ?」

んーっと体を伸ばし、やっと目を覚ました様子のアンニーナはぐいっと手を伸ばしてブランマージュの腕を引いた。

「きゃあっ」

「ほら、あんたも遊ぼう!」

誰かつ、出ておいで。可愛い子猫ちゃんの相手をしてあげて」

「ちよっ、やめっ、離してええっ」

「ふふふ、人生は楽しむものよ?」

ブランマージュ、ピーンチ。

[illegible]

相手は美しい女だった。

獣は低く威嚇するように歯を打ち鳴らす。

魔女は笑う。

「ふふ、生意気で素敵ね？」

多少の魔力でねじ伏せられるような脆弱なものではない。

魔女は吐息を落とし、ゆっくりと近づく。

「おまえをあたくしのものになりたいの」

伸びた手が、一角獣の鼻面に触れる。

「あたくしのものになって？　そうしたら、おまえにあたくしをあ

7

101

ふつと一角獣の姿が馬のそれから人の形へと変わる。嬉しそうに微笑む魔女は、自らの口唇を爪先でなぞり、血で滲ませた。

二人の唇が触れ合う　それが、契約。
月と魔女の血のもとで、高潔な獣は魔女の軍門に下る。

「でもレイリツシュって他にも使い魔いるよね？」

「いるわよ？」

「……他のも同じ手口で手に入れてる？」

「そりゃそうよ。強い魔物や霊獣は矜持が高いもの。でもね、使い魔にしちゃえば魔女の勝ちよ。結局は逆らえないんだから」

アンニーナから聞かされたレイリツシュと一角獣の話に、ブランマ―ジユはほんのちよつとだけ一角獣に同情した。

同情が二割。残りはちよつと……ざまあみろ？

えいぷりるぷーる（web拍手小話）（前書き）

4/1に一日だけweb拍手のお礼用としてupしていた小話です。
一月たちましたのでup。

えいぷりるふーる（web拍手小話）

「ロイズ、今まで意地悪ばかりしていたけど……」

あたし、本当は「」

こくりと喉が上下する。

伏せた眼差しをそっとあげて、小首を心持ち傾けて、

「あなたのこと」

「ブラン……」

「好きなの」

「ブラン！」

「って、信じた？ 信じた？ ちょっと迫真の演技？ すごい？」

「」

あれ、ろいずー？

壁になついでどうしたね？

冷たい壁が心地よいのか？

4月1日えいぷりるふーる。

「エイル。今まで意地悪ばかりしていたけれど……」

あたし、本当は「」

こくりと喉が上下する。

伏せた眼差しをそっとあげて、小首を心持ち傾けて、

「あなたのこと」

「なんだ」

「好きなの」

伏せていた顔を上げたたん、いがいに近い距離にエイルの顔を見て、あたしは息を詰めた。

「え、あ……、あ、信じた？ 信じた？あの
「黙れ」

つて、あの、ちよつ、近いつて。

何故あたしの頬に手を当てる。何故腰に手をまわす。
こら、待て。

「わーん、冗談です！

エイプリルフルです。嘘ですうつ」

「そうか」

手をはーなーせー

「四月馬鹿か。ならばこれも……戯事だ」
ちよつつつ。

4 / 1 えいぷりるふーる。

「シュオン。今まで意地悪ばかりしていたけれど……

あたし、本当は」

こくりと喉が上下する。

伏せた眼差しをそつとあげて、小首を心持ち傾けて、

「あなたのこと」

「マスター？」

「好きなの」

「そんなの知ってますよー」

にこにこ使い魔。

ぎゅうつと抱きしめられる。

「ぼくもマスター大好きですう」

「……」

「マスター？」

「 お腹すいた」

「はい、今日はサバですよ。サバの焼き物。サバのパイもあります」

嬉しそうに使い魔が頬を寄せてくるから、あたしは嘆息した。

「そうね、大好きよ シュオン」

4 / 1 えいぷりるふーる？

落とし穴のその後

新任の隊長殿が着任して四日目

まあ、そろそろだろうとは思っていた。

クエイドはズブぬれで隊舎に戻ったロイズ・ロックにタオルを着替えとを差し出した。

「お疲れ様です」

「随分と用意がいいな」

「いやあ、落ちたんすよね？」

落とし穴に。

クエイドはおろか、部下達全員が薄ら笑いを浮かべてしまう。

「だいたい一度や二度はやられるんすよ。この中で落ちた経験が無いのは一人もいませんから安心して下さい」

それは安心するところだろうか。

ロイズは無然としながらタオルを受け取り、副隊長を睨んだ。

「判っていたなら何故言わない」

「落ちておかないとあとでもっと酷い目にあいますよ？」

「……」

「あれはブランマージュといいまして、この町の外れにある森に住む魔女です。まあ、言わずともお判りとは思いますがね？」

「……」

「それに、先に告げ口するとブランマージュは告げ口した人間を標的にしますから、なかなかねえ？」

すでに一度進言したことがあるクエイドは肩をすくめるしかない。

逆さ吊りに引き上げられ、トクトクと「つまんないじゃないさ」と愚痴を聞かされたのだ。たまったものでは無い。

「あんなものが野放しなのか！」

「そうおっしゃいましてね、相手は魔女ですし」

「魔女だからって許されてたまるか」

いきなり憤りを撒き散らしながらくるりと踵を返す。その足が所長室へと向かうのを冷笑で見送り、もう届かない背に意味もなく声をかけた。

「うちの所長ブランマージュにことさら甘いつスよお」
そうではない。

この地域一帯の人間がブランマージュには甘い。文句をつけているのは警備隊の平隊員達ばかりだ。

実害を蒙っているのは彼等ばかりだから。

逆を言えば、それだけ恩恵があるということだ。

魔女がいる、という。

自然すらそれだけで温暖となる。大気は魔女を愛している。大地は魔女を支える。魔女がいるというだけで何かしらの恩恵が確かに与えられる。

他の大陸には血を好み民を虐げる魔女もいるという。それでも、恩恵の前にひれ伏す者が多くいる。自ら身を捧げる者達が。

「可愛いっちゃ可愛いけどねえ」

よその魔女よりは。

「ブラン？ どこに？」

廊下に上半身を乗り出して騒いだ為だろう、嬉々としてあらわれた第一隊の隊長ギャンツの姿にクエイドは、うっと呻いた。

「最近ちつとも見ないんだよ、どこにいた？」

「いや、どこかは」

「避けられてる気がする」

避けられてますよ、いいですね？

第一隊をブランマージュが避けだしたのは数ヶ月前からだろう。

隊長のギャンツを苛め倒していたブランマージュに、突然「もっと」と言ったのを皮切りに立場が逆転したようだ。

ある意味スゴイ。

そついう作戦だろうという話もあるが。

というかそういう作戦であると信じたいが、このギャンツの様子を見る限り果てしなくあやしい。

「見かけたら教えてくれ」

「はあ」

爽やかなギャンツを見送り、その病にそつと涙する。

いるんだよな、時々ああやって人生をあやまちまつのが。

「行つた？」

「行きましたよ……て、何してんすか、魔女殿」

ふいにとんと肩に重みを感じてびくりと身がすくむ。

「ここは警備隊の隊舎ですよ」

「だってさっき落とし穴に落としたからあ。きつと身を震わせて怒つてると思つたのよ。そういうのって想像するのも楽しいけど、やっぱり見学するのが一番でしょ」

軽く肩に触れてぶかりと浮かんでいる魔女の姿にクエイドは脱力した。

「趣味わりい」

「いやんもつと褒めて」

決して褒めていない。

「あんまうちの隊長苛めないで下さいよ。やりすぎて第二のギャンツさんになったら困るのはあんたでしょう」

「うわー、イヤなこと言うわね。副隊長」

「まだ数日しか一緒にいませんが、真面目な人っぽいですからね。そういうのは危ないですよ」

「そういうのをからかうのが楽しいのよ？」

ふふふつと笑う魔女に溜息しかでない。

その瞳がやけにきらきらと輝いているのは、新たな標的の出現に物凄く喜んでいるのだろう。

実に判りやすい。

「あんたさあ」

「なによ」

「責任とってギャンツさん御嬢に貰ってやってよ。どう考えても悪いのは魔女殿なんだから」

「……昔のギャンだったらいけど、今のギャンは絶対にイヤ」

「うわっ、あんたスゲーヒデー」

呟いたところで、地底からの地響きかと思うような野太い声が割った。

「魔女！そこを動かんなっ」

物凄い勢いで戻ってきたロイズの姿にブランマージュが嬉しそうに笑む。

あああ、真面目な人間程駄目な選択するんだよなあ。

この魔女は放置するのが一番だというのに。構えば構うほどおもしろがるのだから。

このときのクエイドの勘はある意味間違っていない。

web拍手お礼小話つめつめ(3)

クロゼットの中に並んだ愛らしい衣装

ふわふわのパニエ、磨かれた靴。

レースが使われた白いシャツも、その全てが全て魔女ブランマージユの為のもの。

「どこを突っ込んでいいか判らないですよねえ」

「突っ込んだら駄目だろう」

エイル・ベイザツハの屋敷の使用人二人が嘆息しながら掃除をしている。

それまで空き部屋であった場所。

今は明らかに 女性、というか女の子の私室となるように改造されていく部屋。

「寝台まで用意したほうがいいんでしょうかね？」

「」

「寝椅子は置くようにと言われましたけどね」

「隣室にバスタブをいれるという指示はあった」

「じゃあ、やっぱり寝台も用意するべきでしょうかね」

「なあ」

「なんです？」

「……寝台、うちの旦那様のトコ使っつていう話だったらどうするよ、おまえ」

「だから、突っ込んだんじゃ駄目だって」

どうやらエイルの屋敷にはブランマージユの為の部屋があるっぽい

！――！

(いつの間に)

「いいこにしてたか、ブラン？」

白い子猫を膝の上に抱き上げる。

飼ってからだいぶ月日はたったというのに、相変わらずこの子猫は子猫のままだった。

片手だけで持ち上がる。

「成長が少し遅いのかな……ちゃんと食べてるか？」

「ブランちゃんはグルメな猫ですよ。嫌いなものは一切食べようとしないうし」

侍女がくすくすと笑う。

「嫌いなもの、何が嫌いなんだ？」

「そうですねー、残り物とか出すと途端にそっぽ向きますし、一般的猫が食べるような魚のアラとかは見向きもしませんよ」

たとえば人間が食べ残したものにスープをかけたりしたものは絶対に食べない。

匂いをかぐまでもなく、ぷいっとそっぽを向くのだ。

「何でも好き嫌いなく食べないと大きくなれないぞー？」

喉元を撫でながらロイズが言うが、白猫ブランマージュはそっぽを向いてあふりと欠伸をした。

「もしかして自分のこと人間だと思ってるのかもしれないね？」
くすくすと笑う声にロイズが苦笑する。

抱き上げて視線を合わせ、

「人間だったら相当性格悪いぞ。良かったな、猫で」
言った途端に鼻先をかじられた。

「人間の言葉を理解してるみたいですよー、ブランちゃんかしこいんです」

「……理解してるならもう少し性格が丸くてもいいんじゃないか？うすうす気づいてたが、こいつ結構根性悪いぞ」

シャーッと猫が威嚇してくるが、ロイズはそれをもともせずにくりぐりと頭を撫でた。

「ま、そこがいいんだが」

「結局可愛いんですね」

猫フェチの猫好きツボは一般人にはあまり理解されない。
そしてロイズ、ブランマージュは相当怒ってマスヨ。

「ブランマージュ、悪戯ばかりしてはいけないよ。

キミは魔女なんだから」

こんこんと説教を垂れるギャンツの言葉に、つんつと横を向く。

「町の人を困らせてはいけない」

「魔女だから好き勝手なことをしているのよ、ギャン、おばかね？」

ぷかりと浮かんでギャンツの斜め上で止まる。

ギャンツは困ったように微笑んで、

「それでも、夜に魔物を闊歩させたりしてはいけない。何人もの人が悲鳴をあげたろう？」

「そんなに悪い子はよんでないわよ」

「」

「別にかじられた訳じゃないでしょ」

「ブランマージュ」

つんつと横を向き、飛び去ろうとした魔女の足を、咄嗟につかむ。
途端、驚いたブランマージュがバランスを崩し、あぐくそのケリが

ギャンツの腹部にめり込んだ。

「うわっ、もおっ！ あんたが悪いんだからね！ このぼけなす
！」

「……」

どさりと尻餅をついて腹部を押さえ込みうつむくギャンツの姿に、
ブランマージュはだんだんと不安を覚えるようにつつつとその顔を覗き込んだ。

「なによ、痛いのか？ ギャン？」

「ブラン」

「な、なにっ？」

「もつと……」

「はい？」

がしりとその腕がブランマージュの腕を引っつかんだ。

「もつと蹴ってくれ」

「え、え、えええ？ なに？ なんなのっ、何馬鹿なこと！ ちよ
つと、離しなさいっ。」

この馬鹿っ、ヘンタイっ」

「あああ、ブランっ、もつと罵ってっ」

「いやあああっ、気持ち悪いいいいいっ」

「あああ、すごい気持ちいい」

ギャンツさん、へんなスイッチが入った瞬間。

……見てはいけないものが目の前にある。

勤続ン年、懸命な老人はこくりと喉を上下させて息を飲んだ。

最近では定番となっている魔女ブランマージュの為のデザートとお茶
を持参した男が目にしたのは、寝椅子で寝るブランマージュとそ

の傍らで同じく寝ている主。

エイル・ベイザツハ……

主が転寝をしている姿も珍しければ、その姿がまたスゴイ。

エイルの膝の上には、猫耳猫尻尾という最近はやつと慣れてきた謎の格好の小さな魔女。

噂では、主が猫と魔女とを融合したとまで言われている。

なんとオソロシイ。

その魔女殿が、主の膝を枕に寝ている。

さらにオソロシイ。

一見すればとても微笑ましい光景に見える。

ブランマージュは愛らしい。

その傍らの青年も冷徹だのイロイロと言われてはいるが、見目だけは麗しい青年だ。

まるで一枚の絵のように……

その主の瞳がふっと、何のタメもなく開いた。

「
」

明日の朝日は拝めないかもしれない……手にもつ銀のプレートの上、固めたオレンジのゼリーがぷるぷると小刻みに震えていた。

家人の明日はどっちだ？

休暇申請

「半月!？」

突然休暇を申し出たロイズ・ロックに、さすがに所長はいい顔をしなかった。確かに休みをとるようには進言していたが、明後日から半月休みたいなどという台詞にほいほいサインをするわけにはいかない。

「無理は承知です」

さらりと言われる。

「お願いします」

苦いものを噛むようにとんとんと所長が机を指先で弾くと、横から声が掛けられた。

「いいじゃないですか。ロックは良く働いているし 先日だって余計な仕事を任されていたでしょう? いない間は私が第二隊のフオローもするし、副隊長だっている」

助成してくれたのは第一隊のギヤンツ・テイラーだった。爽やかな笑みでぽんつとロイズの肩を叩く。

その言葉に押され、やっと所長は肩をすくめて書類にサインをした。「まあいい。急なことだから、今もっている書類の整理だけはしておけよ。あ、そうだ。どこかに旅行か? 猫はどうするんだ? うちで預かるうか?」

「家人がいますから結構です」

「……少しは遊ばせろ」

つまらなそうに言いながら書類を手渡すと、ロイズ・ロックは丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます、テイラー隊長」

ロイズは受け取った書類をきちんとチェックし、助成してくれたギヤンツに頭を下げた。

「気にしないでいいよ。それに」

「はい」

「どうも第二隊の見回りコースのほうがブランと遭遇率が高いみたいなんだよ。君がいない間にブランとあえるといいんだけど」

微笑ながら言う相手に、ロイズは引きつった。

確実にそれは無い。

何故なら自分はそのブランマージユと旅行に行くのだ。

そう、ブランマージユと旅行。だ。

ぎゅっと書類を握りこみそうになり、慌てて手の力を弱めた。

自らの隊室へと戻り、机に座る。

机の上にある書類は多量だが、明日の昼までには済ませられるだろう。問題があるとすれば、ブランマージユはチビ魔女であるということくらい。

「……」

しかも猫耳猫尻尾までついている。

いや、首輪　そう、チョーカーまで付いている。

それを思うと自然と口元が緩みそうに慌てて引き締めた。

魔女の首には以前からそういったものがついていた。以前ついていたものは黒いもので、あれは確かいつの間にか無くなっていた。アクセサリーなら気まぐれに交換されるのだろう。だから、もしかしたら今もまったく違うものをつけているかもしれない。

だが、昨日再会した時に魔女がつけていたのは　自分の愛猫と同じ首輪、いやネックレスだった。

金色の縁取りの赤い首輪。中央に蒼い石がはめ込まれた綺麗なものだ。

彼女は何をもってそんなものをつけてくれているのだろう。それともまったく何も考えていないのか。

考えてなさそうだ。

自己完結して、それでもやっぱり口元が緩む。

「……なんか気持ち悪いスよ」

机で書類の処理をしていると、副隊長であるクエイドが机の端に珈琲を置いた。

「何がだ」

思わず冷たく言えば、

「楽しそうなオーラが流れてます。今なら鼻歌が出ても不思議じゃないくらいに」

「……」

そうだろうか。

ロイズは慌てて身を引き締めた。

「クエイド」

「はい」

「オレ、明後日から休暇に入るからあとは頼む」

「げっ、なんですかソレ」

「半月程いないから。もし困ったことがあればティラー隊長に相談しろ」

「……まあ、長い休みとるようにつて所長も言っていましたしねえ。だからって急すぎでしょうに」

「ああ、すまないな」

そういいながらも手元の書類から視線を外さない。

「ブラン……」

突然クエイドがぼそりといい、ロイズはじっと手元の書類にペン先を引っ掛け、小さな墨跡を作った。

「どんなブランなんです？」

ブラン？ おまえ、明らかにさっきブランって言っただろう。

「何が？」

「半月とかって、旅行ですか？」

「そうだ」

「へえええ、誰と行くんですかあ？ 一人とかですかあ？ まさか
ブラ」

「クエイド！？」

「ぶらつと一人旅？」

小刻みに肩が震える。

思わずぎつと視線を上げると、クエイドはいやににこやかな微笑み
で小首をかしげた。

「いいですねえ。まあ、独身時代はいろいろ楽しむもんスよねえ？」
「そうだな！」

ロイズは乱暴に言い切り、書類に戻った。

まあいい 旅行だ、旅行。

相手はチビ魔女だが……共に居られるならば不満は無い。

そう、不満は……

不満だらけだった。

web拍手お礼小話つめつめ(4)

「隊長？ 眉間の皺、取れなくなりますよ」

揶揄するようなクエイドの言葉。

ロイズは仕事用のファイルを棚へと戻しながら相手を睨みつけた。

「問題か？」

「目つき悪いんだからあんた、そういう顔していると雰囲気悪くなるでしょ」

「……すまん」

「まあ、なんか悩みでも？」

吐き出せばちよつとは軽くなるかもしれない

はははと笑う部下をじつと見詰め、ロイズは嘆息した。

「何をしてもうまくいかない」

「そうですね？ オレに言わせれば隊長は手際よくイロイロできてますよ」

事務仕事も完璧にこなしている。

身体能力も悪くない。何故こんな僻地に左遷 いやいや栄転されてきたのか判らない。

「ヘタレ認定ってなんだ」

「は？」

「何故オレがヘタレであいつがむつつり？ いやいや、むつつりは褒め言葉じゃない。」

そんな称号は欲しくない。だからといってなんでオレがヘタレ？」

「……」

「オレはヘタレか？」

「イエイエ？ 隊長は立派ですよー？」

ほっときやよかった。

クエイドは両手のひらを自身の前で振りながら激しく引きつった。

……真面目な人程なああ。

「……魔女殿」

クエイドは木の上で寝そべっている魔女の姿にうんざりとした。昼寝はいいが、できれば不用意なところに居て欲しくない。

声をかければブランマージュがあふりと欠伸を漏らす。

「落ちますよ」

うんざりと言えば。

「落ちないわよ」

とかえる。そうっスね　でも猿だって木から落ちますからさ。それに、そんな中央広場の木の上に居られたら迷惑だ。第一隊に見つかったらどうするあんだ。

やれやれと忠告すれば、ブランマージュはにんまりと笑った。

……絶対に駄目な感じの笑いだった。

「副隊長は真面目よねえ」

言っておくが真面目なつもりは無い。

どちらかといえば適当に生きている。サボる技術は一級品だ。

「うちの御嬢さんにならない？」

今何言った？

「あたし結婚はしたいのよ」

「どんな罨だよ！」

あんたはオレを殺す気か？

ギャンツに殺されるかロイズに殺されるか判らん罨をはるな！

それに魔女と結婚なんて絶対にムリ。絶対にイヤ。絶対に有り得ない！

「ちえー、だってあたしの周りって変態ばっかなんだもの」

言っとくがなあ、その変態を作ってまわっているのはおまえだ！！！！

「風邪ですねえ」

寝台で臥せっている魔女の姿に使い魔が苦笑する。

「もおお、ヤ……しんどいつ」

ブランマージュが枕を抱きしめて赤い顔をしているのを眺めて、使い魔はかいがいしくその額の汗をタオルで拭った。

「あとで林檎をすってあげますねえ」

「んー」

「あつたかくして寝なくちゃ駄目ですよお」

「怪我なら治せるのにい」

病気に關しては魔女といえども時間がかかる。

赤い顔でと息を落とすブランマージュの世話をかいがいしく勤め上げながら、使い魔は実に幸せそうにブランマージュの頬を撫でて立ち上がる。

「冷たいものを用意しますね」

「シュオン」

「はい」

「一緒にいてね？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと　ずっと一緒にいますよ」

子供のように不安定になる主の様子に使い魔は蕩けるような笑みを浮かべた。

元氣な主でいて欲しいけれど、たまには病氣も悪くない。

使い魔は緩む口元を少しも隠さなかった。

「どうした？」

月夜の晩だ。

木の上に腰をかけて座っている魔女の姿にロイズは夜警の途中で気づいた。

ぼんやりとしている魔女は、やけにゆっくりとした動きでロイズを見下ろした。

「あら、くま」

「……誰が熊だ」

「なんかねえ、ちょっと体がだるいんだわ」

言いながらふわりと浮かび上がる。

だがその体がへろりと落ちそうになるから、ロイズは慌てて自らの手を伸ばして魔女を抱きとめた。

「おまえ、熱があるんじゃないか？」

「んー？」

「魔女も病気になるのか」

呆れたように言いながら、抱えなおす。

腰の辺りから持ち上げ、自分の首に腕を回すようにと言えはくつたりとした魔女は言われたとおりにロイズの首に腕を回して熱い吐息を落とした。

「平気か？」

「すこーし、しんどい」

ゆっくりとした足取りで魔女の森へと進路を取りながらロイズはブランマージュの腕の熱を、吐息を感じていた。

「人に移せば……治るって言うぞ」

「んじゃ隊長殿にあげるう」

ぎゅっとロイズの頭を抱えて抱きしめてくる魔女に嘆息する。

「おまえ、酔っ払いみたいだ」

実際に酒酔い状態になった魔女を想像すると頭が痛い。やれやれと歩を進めるロイズの頬に平常より高い体温の魔女の手が触れ、ぐきつと音がするほどに顔を無理矢理横に向けさせられた。

何するっ。

と言おうとした唇に、ブランマージュの唇が触れた。

熱い……

「うつつた？」

「……」

「駄目かぁー？」

へにやりと魔女が体重を預けてくる。

呆然と足を止め、ロイズはやがて息をついた。

「　　なあ、ブラン……オレだけにしておけよ？」

聞こえてないだろうなあ。

ロイズは腕の中のブランマージュを抱きなおし、その腕に力を込めた。

「だるーい、しんどーい」

寝椅子に転がりぶつぶつ煩い魔女がいる。

うつぶせでクッションを抱き、時々「へくちん」と謎のくしゃみをする生き物だ。

エイルは冷たい眼差しでそれを眺めていたが、やがて棚に向かった。

「ダーリン、お薬ちよーだい」

「……」

エイルは幾つかの重なった白い陶器を引き出し、着々と準備をすすめていく。

クスリを調合してくれるのだろうとブランマージュは瞳を細めたが、やがて振り返ったエイル・ベイザツハは実に嬉しそうに口元に笑みを刻んでいた。

「鼻水と唾液」

「……」

「研究材料にする」

ぐつと肩口を押さえ込まれ、綿状のものをずいずいと鼻へと差し込まれそうになる。

ブランマージュは声にならない悲鳴をあげながらじたばたと暴れたが……

web拍手お礼小話つめつめ(5)

目の前には三人の使い魔がいます。

一人は蝙蝠のシュオン。得意なことは家事全般。

もう一人は一角獣。得意なことはセクハラ。けれどその能力は計り知れません。

もう一人は大鷹。得意なことは追跡、ストーキング。

「あなたが落とした使い魔はどれですか？」

泉から現れた女神の言葉に、ブランマージュはにっこりと微笑みました。

「いや、落としてないから！」

「まあ、謙虚な心が素晴らしい。この三体の使い魔を全て差し上げましょうっ」

「落としてないから!!!」

七人の小人たちが泣いていると、そこに魔道師が通りかかりました。
「なんだ？」

「ああ、魔道師様っ。魔女があやしい人から貰った林檎を食べて死んでしまったのですー」

「毒林檎だったに違いありませんー」

小人たちの訴えに魔道師は棺で横たわる魔女へと視線を向けました。

永遠の眠りについていたのは黒紫の豊かな巻き毛のそれはそれは美

しい魔女でした。

「」

魔道師は無言でスルーすることにしました。

「待てこらっ！」

永遠の眠りは終わったようです。

「生きてるじゃないか」

「ここはキスするところでしょう！」

「遺体に口付けるような趣味はない」

「おまえは絶対にブランだったらヤツてる！ 断言できるわよっ」

「それがどうした」

……やるね。うん。やるね、キミ。

七人の小人たちが泣いていると、そこに警備隊隊長殿が通りました。
「どうした？ 何があったんだ？」

「ああ、隊長殿。魔女があやしい人から貰った林檎を食べて死んでしまったのですー」

「きつと毒林檎に違いありませんー」

小人達の訴えに、隊長は棺で横たわる魔女へと視線を向けました。

「ブランっ」

棺の中には猫耳猫尻尾のブランマージュが寝ています。

慌てる隊長殿は目を見開き、横たえられたブランマージュの肩を引き起こし、叫びました。

「拾い食いとかがしているからだっ。食い意地張りすぎだろう。」

知らない人からモノを貰って食うなんて、おまえはうちの猫か！」

「うるさいわ！」

「ブラン！」

「耳元で叫ばないでよっ。耳大きいんだからっ。人間より性能いい

のよっ」

耳を伏せてぎゃんぎゃんと訴えてくる魔女を抱きしめ、隊長殿は大きく息をつきました。

「それに、これは白雪姫のパロディなんだから、棺の姫君はキスで起こすもんでしょうが」

呆れたように言う魔女に、隊長殿は瞳を瞬いて提案してみました。

「じゃ、じゃあもう一度？」

「……却下」

「マスターどこいくんですかー」

猫耳猫尻尾のあかずきんがバスケットの中にパンとぶどう酒を入れて歩いていると、にこやかな狼が現れました。

「レイリツシュのどこ」

「ぼくとあそびましょー」

「やだ」

「じゃ、じゃあ、ぼくも一緒に行つていいですかー？」

「好きにきなさいよ」

てくてくと歩いていくあかずきんの後を、狼はぶんぶん尻尾を振つて歩いて行きました。

「もおっ、じゃれつかないっ」

「へへへ、マスター大好きですっ」

「重いつたらっ」

あかずきんの背中に張り付いてにまにましている狼を　冷ややかな顔した狩人が狙っています。

狼っ、気をつけろっつっ！！

「さあ、かわいいそんなシンデレラはここね!」

猫耳魔女は舞踏会に行くことができないシンデレラの部屋を訪れました。

屋敷の屋根裏に追いやられたかわいいそんなシンデレラは

「ヒギヤアウウウッ」

愉しそくに魔獣の合成に勤しんでいました。

屋根裏部屋はさながら悪魔召喚の儀式部屋のようにです。

「えっと……シンデレラ、今夜は舞踏会よ! このあたしがとっておきの魔法で」

「行かない」

魔道師はきっぱり拒絶。

「舞踏会に」

「いかない」

「……舞踏会に出れば王子様と幸せにつ」

自分で言っててそりやないなーと魔女は思いましたが仕方ありません。魔道師は眇めた眼差しと口元に刻んだ笑みで魔女に近づくと、魔女の頤に手を掛けました。

「おまえでいい」

「それはどーでしょーかー、シンデレラはですねえ、王子さまと

」

耳がぺたりと倒れます。

「シンデレラは魔女と幸せになりましたためでしたしめでたし」
棒読みやめてーつつつ。

「アンニーナ、ワイン届けに来たわよ？」

赤ずきんちゃんがバスケットを持ってアンニーナの自宅を訪れると、アンニーナはいませんでした。

そのかわり、魔道師がふんぞり返ってます。

「……………」

赤ずきんはじつと魔道師を見つめて言いました。

「アン食べちゃった？」

「おまえ、まったく別の意味で言っただろう？」

赤ずきん「ぶらん

狼さん」エイル

おばあちゃん」アン（なんか殺されそう）

web拍手お礼小話つめつめ(6)

「アン！ エイル食べちゃった？」

久方ぶりに訪れたブランマージュが尋ねた言葉に、アンニーナは悶絶した。

もう条件反射と言っていい。腹を抱えて寝椅子にへばりつき、ひーひーと肩を上下させる。

「あいつつてば幼女趣味に走ったみたいなのよ！」

更にトドメをさされたアンニーナは息が止まりそうになり、ばたばたと寝椅子の縁を叩いた。

「こっ、こ……っ」

「こ？」

「殺す気かあああつ。ああつ、もおつ、面白い！ あんた面白いわっ」

眦から涙まで出てきてしまった。

喉の奥から「ひーひーっ」という音がもれ出してしまう。

「どっからそうでたのか知らないけど、ははははははっ、いや、うんっ、素晴らしいわ、ひーっつ、さすがあんたは悪い魔女ねっ」

笑い声が時々混じり、まったく意味が判らない。

「なにそれ、褒めてるの？」

「褒めてるわよー？ もお、あたしも見習いたいわー。

いやもホント。あれも莫迦よね！ あたしに乗り換えちゃえばいいのに」

「は？ 何が？」

「いやいやいや。ま、わりと男のほうが純情なのよ。いやー、アレが純情？ うわっ、もう死ぬっ」

苦しそうに悶えながら、アンニーナはがしりとブランマージュを抱きしめた。

「また遊びに来てねー」

「……なんかキモチワルイ」
「だってあんた面白いんだもん」
アンニーナは胃が痙攣するんじゃないかというほどひーひーいうのを止められなかった。

「結婚願望があります!」
多少の酒が饒舌にさせるのか、ブランマージュは陽気に手をあげて宣言した。

「結婚願望があつたのか?」
ロイズはちびちびと酒のグラスを舐める。
あまり強くはない。

「あるわよ!」
「どんな相手がいいんだ?」

さらりと言ったつもりだが声がちよつと上ずってます。

「年上! 年下は駄目よねえ。三十とか上はいいかも」

「は?」

「無口で文句は言わないタイプ」

「……」

「それでもってあたしより強くて、家事ができて」

ぽんぽんと列挙される言葉、最後にこれは大事とブランマージュは指を突きつけた。

「年に一度くらいしか帰ってこない!」

「おまえ…… 本当は結婚願望ナイだろ?」

「あるってば」

「あのね、噂で聞いたんだけどさ」

ブランマージュが真剣な調子で尋ねてくる。

「なんだ？」

「あんだ、実は26だった？」

「もうすぐで27だけだな」

さらりと言われ、ブランマージュは物凄い嫌な顔をした。

「三十過ぎじゃないの!？」

「……いや、おまえ本当にオレの年齢をなんだとだっていたんだ？」

「三十五前後」

「そこまでふけてないからな！」

いやいやいや。

「だってあんだ隊長でしょ？ 腐っても」

「腐ってるってなんだ！」

「そんな若くて隊長って、普通ありえないわよ」

「着任した時は24だった」

「若っ、あんだそんなだったの!？」

「結局これは若さじゃなくて家の問題だろう。それに、うちの兄貴が王宮勤めだから」

さすがに自分で能力とは言えない。

「ああ、七光り！」

「……身もフタもない言い方するな」

「こんどぴっかり君って呼んでいい？」

「呼ぶな！」

「ぴっかり熊」

「……」

「語呂が悪いなあ」

「はいはいはい、ダーリンに質問が届いてます!」

「なんだ、うるさい」

「ダーリンの職業はなんですか? だつて」

熊は隊長ですが、確かにエイルつては引きこもりにしか見えないもんねー

「でもダーリンつて魔道師よね? あれ、魔道師つて職業?」

ただの引きこもり研究オタク?

と言った言葉が悪かったのか、ブランマージュは私室から追い出された。

「つてコトで、家人さんに質問! エイルは何の仕事してるんですか?」

がしりとつかまれて質問されたのはいつもの老家人。まだちゃんと健在です。

「旦那様は魔道アイテムの開発作成に携わっております。旦那様の作成されるものは用途も素晴らしく出来も良いので高値で売れるようですよ。それに、あの……趣味にしていらっしゃる魔物の融合なども好事家の方には喜ばれておいででして、高値で売れております」

「つまり、趣味と実益を兼ねてるのね」

「最近では魔女殿のように耳や尾のつく魔道アイテムが高値で売れています」

「は?」

「耳や尾の付くアイテムです」

「はああああ?」

猫耳・猫尻尾がつくアイテム絶賛発売中です。

つてか、エイルつてわりと猫耳好きだよね……

水遊び

「何て格好してるんだ！」

警備隊の隊舎の横にある馬房。そこには馬の為に水が引かれていて、丁度プールのように水が溜まっている。

あくまでも馬の為に、だ。

「あづーいんだもん」

子供達と水の中に入っているブランマーシュの姿に、ロイズは身を戦慄かせた。

「ねー？」

「いいじゃんねー？」

「ケチくせー」

子供達まで追従しているが、パンツ一枚の子供達。そして、申し訳程度の布で胸元と腰の辺りを覆っているだけのブランマーシュ。

「水着。アンニーナがくれたの。可愛い？」

誰だそれ。

このときのロイズはまだ他の魔女との面識などもちあわせていなかった。

「ばっ、オマエはっ」

にんまりと笑みを浮かべ、ブランマーシュが水桶の縁に手を掛けてふわりと浮き上がる。

裸身に近い格好で中空に浮き、つつつと近寄られてロイズは身を引いた。

「中年男には刺激が強すぎたかしら？」

「だれが中年だ おまえな、オレの年齢を」

幾つだと思っているんだという言葉は遮られた。

「ブランマーシュ！」

突然の大声に。

ざっと視線が声の方へと向く、それは第一警備隊隊長であるギャンツのもので、ブランマージュは一気に青ざめた。

パニックを起こして浮かんでいた体が沈む。慌ててロイズがその体を抱くように支えると、ブランマージュをぬらしていた水気が、ロイズの隊服にしみ込む。

ブランマージュの体が小刻みに震えているのを感じた。

遠くで聞こえたギャンツの声が近づいてくる、咄嗟にロイズはブランマージュを自分の背と木の間に隠していた。

「ロツク。第二隊長　先ほどブランの声がしたようなんだけれど、知らないかな」

ずかずかと近づく足音に背中のブランマージュがいつそうしがみついて震える。

「いや、知らないが」

「そうか、すまなかった。もし見かけたら知らせてくれ。いいね？」
温厚そうな第一隊長はそれでも多少の苛立ちを押さえ込むようにして微笑み、ついで子供達が馬用の水置き場に入っていることに苦笑する。

「おかしな遊びばかりしてはいけないよ。おまえ達もブランマージュを見かけたら教えておくれ。そしてブランマージュをあまり困らせてはいけないよ」

やんわりとつけて軽く手を払って行くギャンツ　それを見送り、ロイズはほっと息をついた。

「……もういいぞ？」

まだ背中で小さなふるえをみせるブランマージュに声をかける。

「こ……」

「ん？」

「腰、抜けた」

は？

ぎゅっと背中の中のシャツを握り締め、ブランマージュが必死にしがみつく。ぐるりと首をめぐらせれば、半泣きのブランマージュの姿にロイズは天を仰いだ。

「ブラン、へいきー？」

子供達が水桶のへりで首をかしげている。

苦笑を零し、ロイズは体制を変えて振り返り、ブランマージュの腕をひきあげて自分の腕の中に抱き上げた。

「ここには第一隊の人間もいるんだから、ヘタな遊びをするな」

「だって、ギャンは外巡りの筈だったのだから」

だから逆に隊舎敷地内で遊んでいたのか。

腰が抜けたというブランマージュは、動けないのかおとなしくロイズの腕の中におさまり、胸に寄りかかる。ロイズは子供達を一瞥すると、

「休ませてくる。オマエ達も程ほどにしろよ」

「んー」

「ブラン、今度は川で遊ぼうね？」

「ギャンツはぼくがいつかやつつけてやるからさっ」

子供達の言葉にブランマージュが薄く笑う。

「ギャンは悪くないわ」

そっという言葉に、ロイズはぎしりと胸が痛んだ。

「ギャンをああしたのはあたしなもの」

「」

「……普通にしてくれれば、いいのにね。普通に好きだって言われれば」

吐息交じりに言うブランマージュの言葉に、ロイズは瞳をすくめた。

何故か胸のどこかが痛む気がした。

調子が狂うのは殊勝な態度など見せない魔女が珍しくしおれているからだ。

生意気でイタズラばかりの悪い魔女ブランマージュ

それから魔女は数ヶ月もの間ロイズの前から姿を消した。

魔女がその姿を見せなくなっではじめて……ロイズ・ロックはその時の胸の痛みの理由にほんの少し近づくのだ。

web拍手お礼小話つめつめ(7)

「師匠、師匠」

寝台の上から動こうとしない漆黒の魔女に、エリィフィアは淡々と呼びかけた。

「うつつ、眠いつ、頭痛いつ、あうつつ」

「お酒の飲みすぎです。酒精を抜けばいい」

端的な弟子の言葉に、師匠であるところの魔女は唇を尖らせた。

「そんなのつまらなくてよ、エリィ」

「ではいつまでも頭痛と友人協定を結ぶのですね」

「まったくあなたときたら理想的な弟子ね」

「反面教師という言葉通りにあなたもとても素晴らしい師匠です」
エリィフィアは冷たく言い、レイリツシュの体からばさりとシートを剥ぎ取った。吐き出された白い裸体は見事としかいいようがないプロポーションだ。まったくどんな魔法を組み立ててこれを維持しているのかとエリィフィアは思うのだが、生憎と師匠はその方面の魔法を教えてはくれない。

噂では人間の生血を日々飲んでいとまで言われているが、それはないだろう。魔物の血清程度なら飲んでいるかもしれないが。

「エリィ、エリィ」

「なんででしょう」

「あなたにプレゼント」

弟子に冷たくあしらわれた美貌の魔女は美しい顔にそれはそれは綺麗な笑みを張り付け、両手でソレを捧げて見せた。

「グエコ」

両手でしっかりと抱かれた巨大なカエル。

カエル。

カエルだ。

まだらの体のぬるりとした生き物。

エリイフィアは暗褐色の瞳を大きく見開き、「ぎっ」と小さくつぶやくと持っていたシーツを放り出してはたばたと寢室を逃げ出した。

「ふふふう、そこでおつかない鬼娘を追いつてね？ 可愛いあたくしのナイト」

レイリツシュはあふりと欠伸を一つかみ殺し、カエルを出入り口の扉前へと放り出すとまたしても寢台にへばりついた。

途端、ばしやりとその寢台に水がかけられる。

ばしやりばしやりと三度続けられ、自らの体もあきれるほどぬれねずみになるとレイリツシュはひきつつた笑みを浮かべた。

「エリイ！……！」

「あなたのナイトは本日の唐揚げですからね！」

どっちが師匠かわからない、エリイフィアとレイリツシュのほんの少し昔の話。

「ブラン、ブラン、ブーラン」

アンニーナはぐいぐいとブランマージュの袖口を掴み引っ張った。

「弟が死ぬうっ」

「いや、うん、なんというかの確に死にそうな場所は避けてるみた
いよ」

「気色悪いのかじられてるっ」

「……船酔いがぶりかえしそう」

その光景は凄絶。

しかし何よりすごいのは、ファルカスが反撃をしようとするのを容易く押さえ込み、靴底で踏みにじり、剣の切っ先でその皮膚の表層に文字でも刻む気安さで体をなぞり、それはそれは美しい微笑を称えて、

「気が触れるまではせぬ。死に絶えるまではせぬ　いつそ殺せと願ってみるがいい」

ものすごく嬉しそうにエイル・ベイザツハ……

「なに、なんなのあの拷問吏みたいな生き物！」

「あれは悪魔類鬼畜目エイル属　超凶悪な悪魔です。すみません」
なんかもお、どうしてあたしが謝っているんだか誰か教えてー。

「ぎゃあ、すとつぷ、ストロップ！　ファル痙攣してるからっ」

「さっさと治せ。時間が足らぬ」

エイルは剣の血を払い、額にうつすらと浮かんだ汗に張り付いた前髪をかきあげた。

悪魔類鬼畜目絶好調……

「はいどーぞ」

二枚のカードを手にブランマーシユがにやにやとしている。

ロイズ・ロックはじっとそのカードを見つめた。

「これだっ」

引き抜いたカードはジョーカー。

「ばーかーめえっ」

笑い転げるブランマージュに、ロイズは唇をへの字に曲げた。

「あたしの勝ちいい！」

「くそつ、また負けたっ」

「やあん、またロイズのお菓子もらっちゃった。あたしふとっちゃうかもだわっ」

ぱしりとカードを場に捨てるロイズとは裏腹に、エイルは本に視線を落しその反対側でファルカスはナッツを口の中に放り込む。

「あんた達もやろーよーお」

「やんねーよ」

ファルカスは吐き捨て、小さな声でエイル・ベイザツハに言った。

「なあ、あの男は気づいてないのか？」

「何がだ？」

「あんなのイカサマじゃないか！ 魔女を相手にカードなんて丸見えみたいなものだろっ」

誰が好き好んでそんなゲームをするだろう。

まあ、賭けているのはたいていが食べ物や簡単な罰ゲームなのだが。
「気づいてないのはブランくらいだ」

「は？」

「あの男はわかってて付き合っておるのだ」

エイルは吐き捨てると、つまらなそうにファルカスを睨みつけ、
あまつさえげしりと蹴りまでくれた。

「混ざって来い」

「……はい？」

「行け、カス」

「……はい」

ぴろりろりーん。

エイル・ベイザツハは手下を手に入れた！

エイル・ベイザツハはプライドが邪魔して一緒に遊べない！
エイル・ベイザツハは矜持だけは無駄に高いのだ！！

web拍手お礼小話つめつめ(8)

「七夕って、もう終わったわよ」

「旧暦がある！　そもそもだな、七夕を祝うのは旧暦がいいんだ。晴れの確率がぐんと上がる」

ロイズの熱弁に、へえっと乾いた笑いを返す。

どうでもいいことに熱中するね、熊隊長。

「まあいいわ、短冊に願いを書けばいいのね」

「そう」

あたしはペンと短冊とを受け取り、じっと考えた。

まあ、考えるまでもなく願いは決まっている。

元の体に早く戻れますように！

よし、牽牛と織姫よ、願いをきき届けるが良いっ。

あたしは自分のペンを置き、隣のロイズの手元を覗き込んだ。

「……あんたは本当にいいやつよね」

ブランマージュが早く大人の体に戻れますように。

あたしがほろりと泣きたい気持ちになっているというのに、ロイズときたら視線をそらし、

「色々あるんだよ、色々」

とわけのわからないことをいい、そそくさと短冊を笹につるしていた。

いろいろって？

「面倒くさい」

むっ、人がせつかく仲間に入れてやろうというのに、エイルは相変わらずだった。

「たまには童心にかえって、純粋な心でもってこういうイベントに参加してみなさいよ」

「こんなところに書いて願いがかなうのであれば世話はなかるう」

……いや、うん。

そりゃそうなんだけどね。

むーっと耳を伏せると、エイルは諦めた様子で息をついてペンを取り上げた。

ブランマージュが早く元のからだを取り戻せるように。

「うわっ、ダーリンにしては意外なっ」

「意外か？」

「もっとこう、なんていうかドロドロしいことを書くと思っておりました！」

それに、あんたチビのほうが好きじゃありませんかー。

というあたしに、エイルは冷たい眼差しを向けながら言った。

「そろそろ色々我慢の限界だ」

「は？」

「いや？」

……いま、なんか背筋が寒くなった感じなんだが……

さりげなく、さりげなく。

ごほんつと咳払いを一つ、これはそう、つまりアレだ。
いやらしい気持ちとかじゃなくて、猫好きとして猫耳とか猫尻尾と
かに触れたいという、まあよくある欲求のひとつだ。

なんといつても、ブランマージュじたいが言っていたじゃないか。
尻尾を触ってもいい、と。

逆撫では駄目だと言っていたが、いやがるようなことをする訳じゃ
ない。

普通にちよつと撫で回したい　撫で回したいっていう表現はな
んだがいやらしくないか？　いや、だから自分は純粹にちよつと触
りたいだけだ。

毛のある生き物は癒しなんだ。そう、癒し。

「えつと、ブラン？」

枕代わりのクッションを抱いて寝台に寄りかかっているブランマ
ージュはどこかうつろに見上げてくる。

「なによ」

「尻尾、さわっていいか？」

ももとの約束なのだから後ろめたく思ふ必要などナイ。
なんだかおかしい気持ちもするが

「絶対にイヤ！」

……猫化が進んでいる為に猫扱いされるのがものすごくイヤだなん
て、まあロイズは知らないのだった。

ロイズ・ロツク　果てしなく間の悪い男。

*下ネタ注意。

「絶対にあんたを相手にするのはイヤ」
アンニーナは凶悪な顔で白髪のをにらみつけた。
魔女の能力をそぐ為の白い綱をかけられるという屈辱の現状、更に凶悪な結界を張られた一室に閉じ込められたアンニーナだったが、その矜持を総動員して相手を睨んでいた。

「我だとしてイヤだ」
ケツと返される。

腕を組んで壁に背を預けた白髪の男は、冷ややかに転がる魔女を眺めた。

「何故におまえなど抱かねばならぬ」

「つて、まてこら。どういう意味よ」

「そのままの意味だ」

「このアンニーナ様をなんだと思ってるのよ」

「色情狂」

「」

「おかしい病気をうつされてはたまらぬからな」

ふふんつと鼻で笑われた美貌の魔女は憤怒に相手を更に強く睨みつけた。レイリッシュの結界の中でなければ殺しているところだ。

「病気なんてもってないわよ、失礼ね！」

「使い古しに用などない。我は穢れない乙女を愛する一角獣だ」

「こつの、バカ馬！　ちよつとこつち来いっ。殴らせなさいっ」

なんと失礼な。熟しきったオンナを舐めるなっ。

体もテクニクも一級品だ！

「ミノムシに何ができる。この阿呆魔女」

きいっつと顔を真っ赤にしたアンニーナだが、やがてにやりと笑みを浮かべてみせた。

「そうね、自信がないのよね。あんたきつとヘタクソなのよ。それとも早X？　あら、もしかして短X？」

「貴様つ、我を何だと思っておるのだ！ 我は馬Xだっ！」
「馬Xと早Xじゃないってことに因果関係はないわよね！」
むしろ馬Xだからこそ早Xなんじゃないのーっ。

この二人の口げんか、最低……

「平和だねえ」

ギヤンツ・テイラーは第二隊のクエイドにやんわりと微笑んだ。

「平和ですね」

「なんていうか、たまにはこう事件のひとつもあっていいと思わな
いかい？」

などとギヤンツらしからぬことを言う始末だ。

あまりのことにクエイドは瞳をぱちくりと瞬いてしまった。

クエイドの手には黒猫が一匹。所長の愛猫の手を掴んで好き勝手に
動かしている最中だった。

「ブランがあんまりおとなしすぎて…… なんとか寂しいものだ
ね」

ただたんにブランマジユがいないことを愚痴っているらしい。ク
エイドは眉をひそめて、

「魔女の森でも巡回してみては？」

ひょっこり出てくるかも」

「そうかな。そうかもしれないね」

途端にギヤンツは元氣を取り戻して手を振って出て行き、クエイド
は猫の手を無理やりふりながら「いつてらっしゃーい」と見送った。

いい人なんだけどなあ。

いい人なのだが決して幸せになれないタイプ。

「ああ、うちの隊長も一緒だ」

だがその隊長は現在旅行に行っている。

しかも……どうやら魔女殿と一緒に。もしかして幸せ絶好調かもしれない。

「でもどうしてだか幸せにしている想像がつかないんだよな」

無駄に勘だけはいいいクエイドだった

ブランマージュの森を訪れたギャンツ・テイラーはいつもとは違う大胆な行動にでることにした。

道端でばったりとブランに出会う確立がかなり低い現状。ならば思い切って自宅におしかけてみてはどうだろうか。

きっとブランマージュは相当怒るだろう。怒ってギャンツを激しく罵ってくれるかもしれないし、蹴飛ばしてくれるかもしれない。あの手で頬を張られたら天国にいつてしまうかもしれない。

なんだかうつとりとしてきてしまった。

ギャンツはときどきしながらブランの自宅の玄関をたたいた。

出てきたのはつりあがった細い眼鏡をかけた一人の女性で、その女性を見た時ギャンツ・テイラーは思わず叫んでしまった。

「ブラン！？ どうして突然年寄りにつ！？」

ギャンツはげしりと踏みつけられ、拳句乗馬用鞭でびしりと叩かれるハメに陥った。

ある意味願いはかなったかもしれないが……

「誰が年寄りだい！」

エリイフィアの激しい怒りを買ってしまった。

「あ、あなたはどなたですか？ ここはブランマージュの家じゃ」

「ブランなら留守だよ。私はあの子の師匠　母親だ」

ふんつと鼻を鳴らしたエリイフィアの言葉に、ギャンツはぱつと顔を綻ばした。

「ブランのお母さん！ 私はギャンツ・テイラー、この町の警備隊第一隊所属、現在は隊長として任務についています。年齢は28独身。両親はすでに他界している為いません。同居もできます」

「……何の話だい」

「娘さんをぼくに下さい！」

エリイフィアはじろじろと無遠慮にギャンツを眺めていたが、やがてぼつりと言った。

「肩がはって困るんだけどねえ」

「もませてもらいます、お義母さま！」

もしかしてブラン、ピンチじゃありませんか？

隊長と魔女

嵐の前の静けさ　とはよく言ったものだ。

ロイズ・ロツクは警備隊隊舎、第二隊室の自分机に向かいながら、がりがりと乱暴にペンを走らせた。

半年近くの間姿を消した魔女。

出てきた途端、彼の周りは騒がしさを増した。

「隊長！」

リーバルテ一帯の獣柵が桃色です！」

「馬の模様が牛柄に！」

「子供達がいません！」

「ほつとけ、子供と魔女は結託している」

くだらん、実にくだらん。

しかも理由を考えるまでもなく、あの魔女、ブランマージュの仕業であると知れる。

あれだけ静かであった町。魔女を案じていた人々も右往左往の大騒ぎだ。

がりがりと書類を書く。

もう幾つ下らない報告書を書かされているのか　あああ、家に帰って猫と一緒に日向でまどろみたい。

「たーいーちよー」

はらりと、自らの上から赤味の強い金髪が落ちた。
どくりと心臓が刎ねる。

ばかりと羽ペンが折れた。

「ブランマーージュ！」

「本日もお勤めご苦労様ね、熊男」

ぶかりと浮かび、頭を下にしたような状態でブランマーージュがひらひらと手を振る。

「おまえっ、何をしまくってるんだ！」

「だあって、みんな寂しかったみたいだからあ。
ただいまーの意味を込めて色々してみました」

ふふんっと、魔女が笑う。

「とつとと色々なペイントを消して来いっ。

子供達はどうした！」

仕事中ということもあり、自然と口調が厳しくなってしまう。

「子供達はあたしの森で遊んでるわよ？」

ちゃんと結界はつてあるから、おかしいヤツとか入らないし、危険な生き物もないから十分楽しめるはずよ」

悪い魔女を自認するくせして、どこか中途半端なブランマーージュ。

ひくひくとこめかみが震えたが、ロイズはどっと肩から力を抜いた。

「ったく、この莫迦娘」

「ねえ、ロイズ」

ブランマーージュはふわりと体をめぐらせ、小首をかしげた。

「ねえ、お願いがあるの」

大きな金の瞳がロイズの視線に絡まる。

なんだか苦いものを感じながら、ロイズは前髪をかきあげた。

「でも、ね？」

「こんなところじゃ……外に、来てくれる？」

魔女は小首をかしげてロイズを誘い、部屋のテラスからそのままロイズを引き出す。

ついていく必要などないというのに、苦いものを嚙むようにして足は外に向かう。

魔女は軽く体を浮かせたまま、すつと流れるように外庭へとおりるとまるで宙に椅子があるかのように足を組んで座る。

「ロイズ」

口元に笑みを刻み、名を、呼ばれる。

ロイズはぎしりと奥歯をかみ締めた。

両手を差し出してくる魔女。

近づく必要などないと判っている。

その後どんなことがあるのかも、二度も三度も同じ手にかかずらうていられるものか！

それでも、ロイズはその誘惑に 抗えない。

くそっ！

呪わしい言葉を口腔で呟き、ロイズは一步を踏み出した。

踏みしめた大地が途端に不確かなものになる。

緩い布地を踏む感触、それと同時にロイズは嬉しそうな魔女の腕を力任せに引っつかんだ。

「きゃあっ」

魔女が悲鳴をあげる。

ロイズはそれを腕の中に抱き込み、素直に穴に落ちた。

大人が一人らしく収まるほどの巨大な　落とし穴。

鈍い痛みが背中当たる。

腕の中に、硬直する魔女。

「もおっ、この熊男！」

一人で落ちなさいよっ」

せっかくロイズを落とし穴に落としてやろうと企んでいたというのに、まさか自分まで巻き込まれるとは思ひもなかった魔女が悪態をつく。

華奢な体を腕の中に抱きこんだまま、身じろぎ一つしない男に

魔女はやがてその勢いを失った。

「やだ、ねえ？　ロイズ？」

「……」

「打ち所が悪かった？　一応シールドは張ってあったはずなのよ？　ねえっ、ロイズ？　なんとかいいなさい、熊男！」

必死な声をあげ、ロイズの顔を覗き込んでくる魔女に、ロイズは

抗えない。

相手の骨すら折れるのではという力を込めて抱きしめ、その唇に唇で触れた。

職務中だとか、問題だとか、そんなことがちらりと過ぎる。

甘い。

くそっ、くそっ、くそっ。

どうしてよりによってこのオンナなんだ！

悪態をつきながら、それでも判っている。

理屈も理由も必要がないことを。

もう、どうしようもない。

「ぶらーん」

「ぶじー？」

突然聞こえた子供達の声に、ロイズは慌てて魔女を離れた。

ブランマージュは一瞬呆気にとられたように瞳を瞬いたが、唇を噛むようにしてロイズの肩を一回押し、その反動を利用して地面へと舞い戻る。

「おまえ達！ 水をかけてやるがいいっ」

「そこまでするのー？」

「ちよつと酷くない？」

穴の中を子供達が覗き込む。

穴の壁に手を掛けて体勢を整えようとするロイズを見下ろし、ブランマージュは真っ赤な顔をして子供達に命じた。

「いいんです！」

子供だ。

ロイズの喉の奥が「クッ」と音をさせた。

それに対してブランマージュは更に激怒したのか、本当にロイズの頭から水がかけられる。

バケツをひっくり返したようにばしゃりと激しくやられ、子供達がキヤーと歓声をあげた。

穴の上から、一対の眼差しが強い光を放ってロイズを睨む。

ロイズは肩を揺らして笑うのを堪えた。

あの眼差しに、囚われているのだから仕方ない。

web拍手お礼小話つめつめ(9)

ふらふらと尻尾が揺れている。

チビ魔女ブランのスカートの下、すらりと伸びた白い尻尾。耳同様、どうやら勝手に動いているようだ。

それをロイズ・ロックは眺めながら思案している風だったが、おもむろにひょいっとつかんだ。

「みゃあああつ」

最近突飛な言動の中に何故かニヤーが混じっているブラン。

「あ、痛かったか？」

「痛いとかじゃなくて！ なに？ いったい何？」

「いや、目の前をふらふらされたら普通つかむだろう？」

「掴まないわよ！ ってか離せっ」

「なあ？ やっぱこれってどうなってんの？」

「引っ張るなっ」

「リボンつけたらかわいいんじゃないか？」

「はーなーせえええ」

「お風呂はいりたーい」

ことのはじまりはそんな台詞だった。

もちろん猫バージョンの時は毎日のように風呂に強制的に入れられている。だがやっぱりヒトガタバージョンでゆったりと入浴したい！ 乙女としてっ。

エイルはぎゃんぎゃん騒ぐあたしがうつとうしいのか、さっさと呼び鈴で家人を呼ぶと、あたしを「風呂に放り込んでおけ」と命じた。

まあ、言い方は悪いけどあんたっていつもなんだかんだってやらせてくれるから好きよ！。

なんて軽口を叩いて案内されたのは、二階の部屋だった。

「……もしもし？」

数名の人間がせつせとバスタブに水を張り、なんだか判らない魔道アイテムで湯に変換させていく。だが一番気になるのは、この浴室の隣　あたしが案内された部屋だ。

「なんでしょうか、魔女殿」

「……なんていうか、随分可愛い部屋ね？」
なにこれ、エイルの趣味？

待たされている間、お茶が出されたりなんかしてそれはいいのだけれど、寝椅子とか可愛い一人掛けの安楽椅子とか、床のラグとか……

「こちらは魔女殿の部屋です」

「……」

なんでエイルの家の中にあたしの部屋があるのか、だれか説明してくれ。

をい？

意味不明で怖いんだけど、をいい？

白いオウムはうんざりとしていた。

「やあ、おはよう」

「……」

さわやかな笑顔で声をかけてくるのは、ギャンツ・テイラー　最近何かとブランマージュの小さな家を訪れて掃除や壊れた椅子の修理などをしている男である。

「こんにちは」

「……」

ギャンツは上機嫌でオウムに話しかけてくる。

「ブランマージュ、愛してるよ」

「……」

「やっぱりこれは難しいかな。でも挨拶くらいは言えるんじゃないかな。おはよう、ブラン」

「……」

「お・は・よ・う、ほら、言ってごらん」

「……おはよう」

オウムはうんざりとしながら応えた、すると、ギャンツは機嫌をよくしてうんうんとうなずいた。

「おはよう、ブラン　ほら、言ってごらんよ」

「おはよう、ブラン」

「かしこいぞ。じゃあ次は、ギャンツ素敵だ」

「……」

「ちゃんと覚えて毎日ブランに言ってくれよ」

オレはチビの使い魔じゃねえし、言葉くらい喋れるんだよつ。
超絶うぜつ。

ギャンツ・テイラー……おかしなところで敵を作る。

「あの、アン様」

「うっさいっ」

黒髪の女が膝をついて必死に主を呼ぶのだが、その主ときたら苛々とした様子を隠すことなく、手の中のカードをチェックした。

手札に同じ数字はない。しかし五枚中四枚のマークは同じだった。

一枚を引き抜き、ペット用のコインを五枚追加する。

「一枚トレード」

「ほう、強気だな」

「おりても良いわよ？」

「我は二枚チェンジ。更に五枚」

勝負に乗る白髪の男にニヤリと笑い、アンニーナは吐き出されたカードをぱしりと翻した。

「ロイヤルストレートフラッシュ、おまえは見事にバラバラのようだが？」

「いーかーさーまーよおおおっ」

「アン様っ、アンニーナ様っ、帰りましょうっ」

「うるさい！ この馬鹿に勝ち逃げされてたまるものですかっ。今度は麻雀！麻雀よっ。満願縛りっ、割れ目ありっ、安目であがったら殴るっ」

「メンツが足らぬだろう」

「シディっ、王宮官吏の一人でも引っ掛けといでっ」

「帰りましょうよーっ」

……ファンタジーで麻雀は止めようよ麻雀は。

*ごめん、たまさ。実は麻雀はあまり判らないです。

チビ魔女物語

二又に別れた枝だった。

そう、それは無造作に置かれた一本の素晴らしい樫の木だった。

キバタンの瞳がきらきらと輝き、恍惚に身を震わせる。

「すげえ、すげえぜ。これはなんて素晴らしい止まり木！」

にぎつと足で握り締める。こう、なんとも足にぴたりと吸い付くようなフィット感。滑らかな木肌。もう片方の足も乗せてみる。

うむ！

これほど素晴らしい止まり木はついぞない。

キバタンのルウは感動にむせび泣きそうになってしまった。この木に身を預け、とっておきの虫を食おう。きっと至高の極みを得られるに違いない。

鼻歌を歌いながら飛び立ち、森に虫を探しに行くことにした。ああ、人生は素晴らしい。

丁度そこに帰宅したのはブランマーシュ 10歳。

エリイフィアの娘として魔女見習いをしている。琥珀色の瞳と赤みの強い金髪の少女だった。赤いフードをばさりとおろし、外からの寒さでかじかむ手にふーっと息を吹きかける。

「エリユーシュ、火をつけて」

外から一緒に戻った巨大な灰色狼に頼む。火の魔法は制御が利かない為に禁止されているのだ。

体についた雪虫をばばっと体を震わせて落としたエリユーシュは「ふんっ」と横を向いた。

「しらん」

「もおつ、いいじゃない。ケチ」

「自らできることは自らでこなせ。おまえには二つの手がある」

灰色狼はその澄み渡るような瞳で暖炉を示した。

「判ったわよ」

ブランマージュは唇を尖らせ、暖炉の置き火を探る為にふとテーブルの上に置かれている棒に手を伸ばした。

火かき棒の代わりにそれでももって炭と灰とをかき回し、灰の中に隠れている置き火を引き寄せてファイゴでよいせと酸素をおくる。

まだまだへたくそなものだから、周りの灰を飛ばしてしまい酷い有様になってしまったが、それでもせつせと火を熾そうと試みる。やがてそれをじっと見つめていた狼は、あからさまに欠伸をひとつ吐き出すと、ブランマージュの持つ棒の先端に自らの魔力で火をともした。

「そんなでは体が凍える」

冷たい口調だが、ブランマージュは肩をすくめて木の棒を炭の中に放り込むと自分よりもずっと大きな狼の首に抱きついた。

「エリユーシユはあつたかいなあ」

暖炉の火が赤々と点るまでエリユーシユで暖を取ることに決めたブランマージュだが、その時になって窓から飛来した鳥に顔をしかめた。

「窓閉めて」

「つて、おまえらナニ？ え、おまえら……おまつ、その燃えてる木は何だよ！ なーにーしてくれてんだよおおお」

「いやあー、何虫飛ばしてるのっ。このバカ鳥っっ」

キバタンのルウの悲哀を理解してくれるものは誰一人としていな

か
っ
た。
。

酔夢（前書き）

*これは本編執筆中にかかれたものの為、まだ魔女っ子ブランです。
しかもあまりにも阿呆すぎてお蔵いりしました。笑って流して下さいませ。

お酒がらみの二本です。

酔夢

「旦那様っ」

珍しく慌しい足音と共に応えすら待たずに重厚な扉が開かれる。

旦那様と呼ばれたエイル・ベイザツハは灰黒の眼差しに憤りを滲ませて睨みつけたが、相手の慌てぶりのほうが大きかった。

「魔女様が」

「……ブラン？」

「本当に申し訳ありませんっ」

蒼白な家人はがばりと深く頭を下げた。

「酒か……」

「ダーリンも飲むう？ 美味しいよー」

居間に飾られている酒に手を出したブランマージュがヘラヘラと笑っている。

「黙れ酔っ払い」

「よってないよー？」

小首をかしげて酒瓶を抱きしめている様はあまりにも情けない。

「だってあたしお酒つよいもん」

「」

「瓶の半分はへーきだもーん」

それは強いのだろうか？ 酒を滅多に口にしないエイルには理解の範疇外だ。

「そもそも今のおまえは子供とかわからぬだろうに。酒の浸透率も違う 立派な酩酊状態だな」

「ダーリンものもー」

エイルは冷ややかに呼気を落とし、手を伸ばして酒臭い生き物の手から酒瓶を引き抜き背後の家人へと手渡すと、そのままブランマ

ージユの体を抱き上げた。

「お部屋の準備は整っております」

「そんなことより、これにもう飲ますな。体に悪い」
基本的には猫なのだ。

猫の体をベースとして作られた仮初の体。

抱き上げれば温かく、柔らかく、傷つけられれば血すら流す。けれどこれは偽りのイキモノ。

「酒臭い……」

半眼を伏せて呟き、自室へと向けて歩む。

ふと自分を見上げてくる眼差しとかちあった。

きらきらと瞳を煌かせ、口元は嬉しそうにぐにぐにと歪んでる。

この顔は良く知っている。

何か企んでいる時の顔だ。

「ダーアリン」

「なんだ」

「いっただつきまーす」

抱えなおして私室の扉を開く。

イタズラをする気満々のブランマージユにうんざりとしながら扉を

あければ、突然がぶりと鼻がかじられた。

「によ？」

「……」

「おいしくないよー？」

「」

「おいしそーだとおもったのになー？」

鼻をかじられた。

鼻を ひくりと口元が引きつる。

しかも思い切り歯をたてて。

「このっ、愚か者！」

「ちーでたー」

にやははははっ、と笑い出す莫迦猫を寝台に放り出す。

血が出たと言って喜ぶブランマージュを睨みつけ、エイルは冷ややかにブランマージュの横に手を掛けると口元に笑みを刻んだ。

「治せ」

「んん……」

ブランマージュの眉間に皺が寄り、顔をあげて自らが傷つけた鼻頭をぺろりと舐める。

二・三度同じ所作を繰り返されれば痛みがひく。痛みはひくが、自分の体の中のどこか別の場所がざわりと騒ぎ、血の流れが速度をかけていく。

きしりと寝台が音をさせ、酒の香りが鼻腔をくすぐる。

そのまま、ブランマージュの薄く開いた唇に自分の唇を触れ合わせた。

強く押し当てるわけではなく、ただ唇の表面が触れるか触れぬのかのぎりぎりの距離で。

「噛むな 舐めるんだ」

差し入れた舌先におずおずとブランマージュの舌がふれる。

それをからめとるようにくらい付けば、

「苦い！」

にやーっと奇妙な声をあげてブランマージュはぼてりと寝台に倒れこんだ。

「おいしくなーい」

自分の中の熱が急激に引いていく。

エイルは自嘲するように口元に笑みを浮かべ、前髪をかきあげた。ブランマージュにはきつと先ほど飲んでいた珈琲の味がしたのだろ

う。

「私には甘すぎだ」

自分の舌先には甘い吐息と魔女の息吹、そして蜜の味。

失敗したわ。

あたしはエイルを前に反省した。

猛省と言ってもいい。

ほんのちよつとしたイタズラだ。

ヤツの口にするもの全てに酒精を混ぜただけ。

直接体内に送り込んでもいいけれど、まあ、一応ね 絶対量って

いうのがあると思うのよ。ばったり逝かれでもしたら目覚めが悪い。

につこり微笑を浮かべるエイル・ベイザツハ 気持ち悪い。

「ブラン、おいで」

いやいやいや。君のデフォならここは、来いでしょ？

なに、おいでって。

「いや、えっと……あの、スミマセン」

手をつかまないで。

瞳を細めて口元に笑みを刻みつけ、あたしを抱き上げる。

ああああ、チビ魔女は簡単に持ち運べるコンパクトサイズ。やめて、

なぜに膝に乗せる？

「ブランマージュ」

甘い吐息。

その吐息には酒気が混じる。

酔っ払いだ。まさに酔っ払い。ひいつ。

片手で抱きこまれ、もう片方の手があたしの唇をなぞる。

冷たい手がゆつくりと優しく。

「悪い、悪かったです」

開放を要求する！

「ブラン……」

指先が唇を割り、歯をなぞる。

うひいっとあたしの背筋に悪寒が走り、あたしの尻尾はいつもの倍に膨れ上がる。

「……見せてごらん」

「え、なに？」

囁かれた言葉が理解できなくて問い返す。エイルが口の端を歪めて笑い、すつと顔があたしの耳元に近づき、もう一度囁いた。

「おまえの全てを知りたい」

うわぁ、食われる！

じたばたと暴れるあたしの耳をぱくりと啜える。それ猫耳、皮膜薄いからっ、やーめーてえ。

なんというか、駄目だ。これはエイルじゃない。

ちよっ、本当に勘弁。

ごめんなさい！

あたしが悪かったってば！

クリスマス・ヴァカンス（前書き）

冬だけと海だったりする。

クリスマス・ヴァカンス

「うーみいいいつ」

青い空、白い砂浜、さざめく波！

こちらこちら、視界の隅にある白骨は無視しなさい、無視。
今日はヴァカンスですのことよ！

え？ クリスマス？

冬だって？ そんなことは関係ありませんよ。
だってココは万年常夏。

視界の端にいろいろいやんな落し物とかあったり、大悪魔が砂浜に寝椅子を並べて優雅に日干ししていたりするのは華麗にスルーの方針で。

「オレ、おまえら魔女の神経が時々信じられない……なんで始原の森だよ」
「だって誰もいないもん」

あたしは腰に手を当ててにんまりと笑った。

「島全体がプライベートビーチ。遊びたい放題ですっ」

それでもって常夏！ 魔力に満ちたこの島は海遊びに最適な適温だ。
冬だとかクリスマスだとか関係ナシ。

「ねーっ」

ぱんつと小気味良い音をさせて両手のひらを打ち合わせたあたしと
もう一人。

顔を合わせてうなずくのはアンニーナ。今日のアンは超ビキニ

「あらあん、他に人がいないんだから全裸でもいけるわよ」とい
うアンだったが、先程ロイズの強い説得により水着を着ることを承
諾。アンの使い魔という鷹も泣きながら止めていた。

アンの使い魔はどうやら良識があるらしい。

ま、全裸よりはマシという格好なのでロイズは極力視線を向けないようにしているのだが逆にエイルはじつくりとそれを眺めた挙句、ふっと鼻で笑ったものだから危うく怪獣大戦争に発展しそうになった。

そう、エイルもいます。

わざわざ大悪魔が日陰を作る為砂地にどすつと植えた木に寄りかかって本を読んでいる意味はまったく理解できないが。

海だよ、海！ ヴァカンスしにきているというのにもかかわらず、何故木陰で本を読んでいるのか。この不届きものめっ。

「遊ばないなら来なければいいんだ。ぼくが人化できないじゃないかつ」

と、あたしの頭にはりついている蝙蝠が苦情を言うが、まあごもつとも。

相変わらず蝙蝠はエイルの姿だった。

少なくともあと半月はみっちりその姿で反省しろ。

そしてすっかりエイルの前で人化けて力いっぱい雷撃をくらう方がいい。

「ふふふ、あたしが護ってあげるから変化してみればあ？ ぴっち
びちのブーメラン水着でお願い」

アンが嬉しそうに　　というか好色そうに言う。

「本当に護ってくれますか？」

嬉々として蝙蝠が言うのだが、おまえ明らかに危ないだろ。

いや、いくらでも報復されていいけどね。

「とーぜんよ」

自信満々でうなずくアン二ーナに、ぼんつと蝙蝠がエイルの姿で

ブーメラン水着。

ぶはっ。

ひいひいっ、見てはいけないものが目の前にっ。

卒倒するあたしを、ひょいっとなろいずが抱き上げた。

「ブラン、ここは危険だ。いくぞっ」

そう、今のあたしは実はちびブランだった。

だってエイルの前でオトナブランは危ないでしょ？ それにチビでいることにも慣れてきたし、チビのほうが色々と便利なのよ。

人間って子供に甘いよね！

特に熊は。

「マスターっ」

わーんっとなおいかけてこようとするシュオンに、あたしはべっとな舌を出した。

よるなっ、来るなっ。

なんかこの猥褻罪めっ。ロイズみたいに普通のだぼっとなした水着にしとけっ。

「やあん、やっぱりいいわ。魔導師」

「ぼくシュオンですうっ。アンニーナ様、はーなーしいてえええっ」

襲われてる、ボケ。

背を向けてその場を離れたあたしとなろいずだったが、元の地点はあっとな間にな戦場となした。

エイル・ベイザツハの怒りを当然のように買ったのだが、アンニーナはけろりと強化結界の中でエイル姿のシュオンを襲っている。

「見るな！ 教育上よろしくないっ」

ロイズは憤慨して岩場の辺り 被害が来ないように避難し、そのくぼ地に溜まった海水の中にあたしの足をおろした。びしょりと冷たい水がはねる。

「まずは体操だ」

「……いや、いいって。平気」

「駄目だ。ちゃんとしないと、心臓に悪いし足がつつたりするんだからな」

水に入るときは足から順番に水をかける！

おまえ……教師か。

はるか後方では謎の光が明滅したりしているのだが、ロイズは変わらずマイペースに体操などしている。あたしはそれを無視し、さつさと岩場に溜まった海水の中、波に取り残された小魚なんぞを追い回してみた。

「さかなーっ」

「魚好きなのか？」

「すごいスキーっ。生で食べるの美味しいっ」

「は？」

うつ、まずい。

何を言っているかあたしっ。

あたしは慌ててふるふると首をふり、引きつった笑いを浮かべてみせた「冗談にきまつてるでしょ。生で食べるなんて、猫じゃあるまいし」

あたしは人間ですよーっ。

魔女ですっ。

猫ではありませんってば。

なんか最近疑われているような気がしないでもないけど、あたしは猫じゃありませんよ！

早く分離して魔女と猫に別れたい！

でも実際問題そんなに簡単なことではないようで、分離に失敗する訳にもいかずに慎重に慎重をきたしているあたしは現在も夜はロイズの自宅で相変わらずの白猫ブランをせにやらんわけだ。

酷すぎる。

そしてせつな過ぎる。ああああ、あたしって実はいいやつじゃない！？

ロイズは苦笑し、くしゃりとあたしの頭を撫でた。

「少し泳ぐか？　せつかくの海だし」

「いや、泳ぐのはいいや。海ってなにがいるか見えないから、ちょっと怖い。足元見えないし」

当然魔力を使えばいい話だけどね。

でもそういうのは面倒くさいからしない。

「じゃあ、何か昼飯用に貝とか探してやるよ。おまえは危ないからここにいろよ？」

言うや、ロイズは豪快に海に挑んでいつてしまった。

潜れたか…… 本当に身体能力だけは高いな。

あたしは肩をすくめ、岩場に囲まれたほんの少しだけ海水が深い場所に入れた。一回とぶんと胸元まで水に入った。

「うつつ、猫に水って実は駄目かも」

尻尾が嫌がつてる。

耳は完全に伏せた　当人としてはもっと水遊びしたいのだから、どうやら体は拒絶しているようだ。

あたしは元気の無い尻尾を掴み、ぎゅーとしぼった。

だばだばと水気が落ちて、岩場に腰を預ける。
ふるふるっと身を震わせ、一気に水気を飛ばして息をつく、ふいに、肩に重みがのしかかった。

背後からぎゅっと抱かれる感触は馴染みのものだ。

あたしは苦笑して腰に回ったその腕を叩いた。

「怪我しなかった？ ま、アンが護ってやるって言うてたから心配はしなかったけどね」

いつの間にか魔導師VS魔女の戦いは終焉を迎えたらしい。アンの声が遠くでしているが、戦闘音はしていない。

ぎゅっと更に強く抱きしめられ、あたしは眉を潜めて顔を後ろへと向けた。

素肌にパーカーを引つ掛けた姿の使い魔が「マスター」と囁く。いつものどこか高い声ではなくて低くて奇妙な色を称えた呼びかけに、あたしは更に眉を潜めて小首をかしげた。

ちゅっ、とその唇が耳の付け根に、瞼に、頬に触れてくる。

「シュオン？」

どうかした？

いや、こいつのぎゅーもキスもいつものことなんだけどさ、なんだからいつもと違って居心地が悪い。

腰を抱く手とは逆の手 確かめるように唇の端を親指の腹でなぞられ、あたしは引きつった。

「ダーリン？」

おそろおそろ問いかける。だがそれは確定だった。

だって魔力がシュオンじゃない！

言葉にした途端、あたしの尻尾がぶわりと毛を逆立てた。

ぎゃあ気持ち悪い。

おまつ、時々本気で訳判らないことするの止めてっ。

人間崩壊してんじゃないの？ 脳みそいっちゃてんじゃないの！？

「気づくのが遅い」

くつと笑い、唇を引き結んで笑うと更にあたしを抱く腕に力を込めた。

「愚か者」

「離れろ、この変態幼女趣味」

エイルがそのまま口付けしようとしたところで、エイルの頭上から謎の貝類が降り注いだ。

「幼女趣味は犯罪だからな！」

海人ロイズ・ロツク……その貝、へんなカタチしてますよ。巻貝からなんかによるとした触手出てますけど、それ本気で食料として持ってきたのかおまえ。

なんか焼いたら食えるとかそういう問題じゃないっぽいんだが。

「貴様は 判っていて邪魔しているのではあるまいなっ」

「判っているに決まってるだろう！」

怒鳴るロイズに、エイルは冷ややかに口元に笑みを刻みつけた。

あああ、ここでも怪獣大戦争だよ。

あたしはそおっとその場を離れた。

砂浜に戻ればアンニーナが嬉々としてシュオンを襲っている。馬鹿だな、シュオン、蝙蝠に戻ればいいのに。襲っているといっても明らかにからかって遊んでいる様子なので、あたしは肩をすくめて

問いかけた。

「戦闘はエイルの根気負け？」

「あら、あいつってばすぐに辞めたわよ 別に痛くもかゆくもないことに気づいたってことでしょ」

そうかあ？

自分と同じ姿のシュオンがあたしにはりついてキスしたりしていると烈火のごとく怒るぞ、アレは。精神衛生上の問題だと思っんだが、アンと自分の姿がいちゃついても平気ってことか？

自分が襲うのと襲われるのとは違っってことだろうか……相変わらず判らんヤツ。

開放されたシュオンがあたしにぎゅっとすがりつく。

「マスター！ アンニーナ様が虐めますっ」

「はいはい、とりあえずあんたその砂に寝ろ」

「はい？」

「砂蒸しっ」

あたしは、ふふふつと笑い、シュオンを蹴倒しそのまま砂をかけはじめた。

アンニーナがあきれつつ加わる。

すごい、なんかきちんとヴァカンスっぽい。

浜辺の遊び満喫中！

「あの二人は？」

「さあー？ 仲良く喧嘩してた」

「本当に仲良しねえ」

アンニーナがくくくつと喉を鳴らし、せつせとシュオンに砂をかけていく。あたしのイメージとしては丸くこんもりと砂を載せ、最後には「シュオンここに眠る」と飾り文字をいれてやりたいのだが、しかしアンニーナのやりたいことは違っのだった。

「ぎゃーっ、何してんの、何してんのっ！」

シュオンの体の上に乗せられた砂の形は、そのまま人間の形。

「あらあん、やっぱり砂を固めた裸像よあん。大事な部分はやっぱり大きいほうがいい？　意外にちっさかったりしたら笑えるんだけど」

いやあああ、なんでそう下品なのあんたって！

「うっう、見れないけどすごくいやな感じです」
見なくてよろしいっ。

シュオンが切ない顔でこちらを見つめてくるが、あたしは頭を抱えるくらいしかできない。

「そんなに見たいのならば見せてやる」

だから突然割って入ったエイルの声に、心臓が破裂するかと思った。
「きゃー、魔導師男前！　そうよね、男はすっぱりさっぱりぬいじやいなさいよっ」

「辞めろっ。辞めなさいよあんた達っ」
って、

「ダーリンっ、ロイズはどうしたの！」

「沈めた　　というのは嘘だ。落しはしたがな」

ふんつと鼻を鳴らし、エイルは無造作にアンニーナ作　砂の芸術

？をどすりと踏みつけた。それは見事な股間部分を。

「ふぎゃー」と悲鳴をあげてシュオンが蝙蝠へと変化する。

びくびくと短く痙攣する様がものすごく不憫を誘う……平気か？
もう色々無理なのか？

蝙蝠はふらあつと二・三度その羽をはためかせたが、やがてぱた

りと砂地に落ちた。

おまえの死は無駄に　　ってか無駄いがいのなにものでもないか。

「あんたそのへんにアレ放置してきたの？　ここどこだと思ってるのよ、馬鹿かつ」

あたしはほとほと呆れてとんつと砂地を蹴ろうとしたが、エイルの手がすばやくあたしの腰を掴んだ。

「ダーリンっ！」

怒るよっ。

「使い魔共もいる。危険などあるうはずがない」

確信犯めっ。

確かにシュオンは役にたたないだろうが、他の連中ならばやすやすと人間を危険に晒したりはしないだろう。それでも信用などできなくてそのまま飛ばうとすれば、アンが苦笑した。

「魔導師、貸し一つ」

「それを言うのであればブランにであろっ」

「あら、あんたによ？　ま、クリスマスプレゼント？」

お返しは三倍返しくらいでいいわよおん。

アンニーナは口唇を歪めて空間を転移した。

はっと気付けば腰抱き込まれたままのあたしと、突っ立っているエイル・ベイザッハ。足元にはまったく頼りにならない瀕死の蝙蝠だらだらといやんな汗が流れるのを感じる拳句、肩甲骨の上のあたりを生暖かい湿った感触がやけにゆっくりと舐めあげた。

「どうやらサンタからの贈り物のようだ」

クツと喉の奥で笑う男の言葉に、あたしは拳を固めてふるふると震わせた。

アンの裏切りもののおお。

web拍手お礼小話つめつめ(10)

「いい加減、離れろっ」

げしりと蹴倒し、後に残ったのは腰抜け状態のあたしというまさに無様な有様でした。

駄目だ、生理的にムリだ。

ギャンツというだけで力が入らなくなって身震いが酷い。

そしてギャンツを蹴倒した白いオウム　今は十五歳程度の少年のような格好をしたルウはへなへなになっているあたしの前で腕を組み、

「おまえはアホかーっ」

理不尽な怒鳴り声を発していた。

「好き勝手やらすな、バカチビ」

「お、おまえだろーっ」

楽しんでいたのはおまえだっ。

「このバカ鳥っ」

「うつせー、阿呆チビ。つつかおまえの使い魔どうした？　オレは帰るからな？　エリイの家に帰るからな？　くそっ、どうしてオレがおまえの家で、あの糞狼がエリイの家担当なんだよ。まったく意味判んねえ。早く帰る。俺は帰る。帰るんだからなっ。おまえの使い魔はどこだっ」

たんたんつと足で床を叩きながら睨み付けてくる鳥　人間バージ
ヨンは苛々と辺りを見回した。

久しぶりに会ったが、あたしは気付いてしまった。この鳥は人のことをチビだなんだというがちよっとまで。

「鳥」

「っせーっ、なんだ、ちび」

「……どう考えてもあたしのほうが背高いよ」

「誰が身長の話をしてんだよ！ オレはおまえの使い魔の話をしてるんだろっ」

* なんだかんだで一人で残して帰れない兄貴分ルウ……… 転移のできない蝙蝠が中央から戻るまでブラン家にお留守番。

「何でも拾ってくる癖どうかして下さいっ」

エリサは帰宅した主に思いつきり噛み付いた。

ロイズの肩には羽を持つへんな動物が乗っかっている。顔は獅子のように見える。尾はまるでトカゲのようだ。激しくなっているのかロイズの頭にすりすり頭を寄せている。

「拾ったんじゃない」

げんなりとしながらロイズは廊下を歩き、足元にいるダスティの頭を軽く撫でた。ダスティは激しく威嚇しているが、肩の生き物はそれ知らぬ顔だ。

「だったら」

「もらったんだ」

「同じですよっ。うちにはもう犬も猫もいるんですからねっ」

エリサのギャンギャンという声に、肩にいたティラハールはぼんつとその姿を少女のそれにかえ、エリサは目をむいた。

「なっ、はあっ？」

「……使い魔なんだ」

ロイズの言葉は歯切れが悪い。

「犯罪？ え、えええ？」

「何が犯罪だ！ オレは幼女趣味とかじゃないからなっ」

なんでこんなことに……

日本昔話し ブラン太郎

あるところにおじいさんとおばあさんが……はいなくて、あるところに巡回中の警備隊隊長がおりました。隊長ロイズが川辺をあるいていると（略）

どんぶらこつことどんぶらこつこと流れてきた大きな桃をロイズは持ち帰りました。

「何すか？」

「違法投棄かもな。産業廃棄物かもしれん」

眉間に皺を寄せて言う警備隊隊長のの言葉に、彼の部下は言いました。

「とりあえず冷やして食べますか？」

「駄目だ。これは一定期間の間保存してその後は処分する。また同じように流れてくるかもしれないしな。こんな大きなものを川に流すなんて非常識だ」

倉庫に放り込んでおけ。

淡々と処理する隊長に、「食べちゃえばいいのにー」と彼の部下は不満顔で倉庫へとソレを運んでいきました。

*ブラン太郎生まれない。

あるところに……（もつと略）

引きこもりで根暗と噂のあるエイルですが、たまには川辺の散歩に出ていると川を流れてくる大きな桃と遭遇しました。

「……」

大きいです。

エイルは静かに流れるそれを見つめました。

奇怪なものは大好きですが、相手は桃です。大きくても桃です。研究材料になるかをじっくりと考えましたが、どうみても桃。そして生憎とエイルは自分の腕力と体力に自信ありません。

ぐぐぐつと更に考えたようでほんのちよつと眉間に皺がよりました。

どうやら持ち帰ることにしたようです。わざわざ使い魔（蛇形・ぬめぬめ）を呼び出し、持たせました。帰宅するまでの間町の人は阿鼻叫喚です。

自分の研究室でそれを割ってみると中から玉のような……（以下略）

阿鼻叫喚でした（ブランだけ）

*いくらブラン太郎でもエイルに育てられたくはないだろうなー

ティラハール

皆様、いかがお過ごしでいらつしやいましょうか。

悪い魔女のブランマージユ。華麗なる第二のデビュー……といった
いところですが！

「ブランちゃん、ブランちゃん？」

「なーうウ」

あたしは押しつぶされたカエルのような声で応えた。

何故ならあたしは本当に押しつぶされているから。そして何より、

「あらあら、ダステイ、ブランちゃんが苦しそうよ？」

くすくすと実に楽しそうに手を伸ばして侍女のエリサはあたしを
犬の前足の下から救出し、その腕の中に抱き上げた。

そう、あたしはブランマージユ。

相変わらず白い猫ですが、なにか？

そもそもさ、分離って簡単にレイリツシュは言っただけで、オ
レンジジュースと牛乳を混ぜることは簡単でも、その二つを分ける
ってというのは実際たいへんなコトだとなあぜはじめに気付かない。

拳句の果てにあの大悪魔は笑いながらおっしゃった。

「簡単にできたら今頃はティラハも分離してと思う」

わかってるじゃないですか！

わかっててやってる訳じゃないよね！？

喧嘩なら買っつよ。って……いや、うん、冗談ですヨ。レイリツシ

ユコワイ。

そんなこんなで分離の利かないあたしときたら、ココロネが優しいものだから未だにロイズの家で猫ボランティアに励んでいる。

けっ。

昼間はエイルの邸宅で文献を漁り、夜はこうしてロイズの家で猫をしている。え？ 蝙蝠はどうしているって？ 蝙蝠って言つのは逆さづりになってるモンよ、そうでしょ？

それでもつてもういっこ報告することがあるとすれば、ロイズの家に家族が増えました。良かったね、花嫁さん？ ではなくて、娘さんです。

それはそれは愛らしいお人形さんのようなティラハールが、あたしの大事な寝場所であったソファに座ってる訳ですよ、奥さん！

無表情で。

「ティラちゃん今日のご飯はお肉がいいかしら？ お魚？」

エリサは困ったようにティラハールに話しかけるが、勿論ティラハールは無言。まるきり置物状態だ。

話しかけても返答は無い為、エリサも扱いに困っている。

ほうつておけばいいのに、と思いつつ、あたしはエリサの腕から抜け出してティラハールの膝に飛び乗った。

せめて動きなさいよ。顔振るとか。

なんであたしが気を配らんといかんかね？

あたしはさー、悪い魔女なんだよ。今は色々恩義のあるヤツの家で

ボランティアしているだけで、それ以上のことを求められも困るのよ。

『人間は好まぬ』

よく言うわよ。あんたってばロイズ大好きじゃないの。なついてるって、本当に。

あたしがケツという気持ちを込めて「にゃーにゃにゃにゃにゃ」と言え、ティラハールは物静かにいつものだみ声で応えた。

『なついてなどおらぬ』

「にゃ？」

『あれは最後の晚餐にすることにした』

……保存食ですか？

なんというか、好物は最後に食べたいタイプってことでスか？
ロイズ、ある意味やっぱり気に入られてるみたいだから、えっと、良かったね？

魔女の誓約

心が狭い男っていうのはさ、やっぱ嫌われるもんだと思うのよ。
男っていうのは、どんな事態も鷹揚に受け止めて、女性が困っていたらにつこりと微笑んで手を差し出すもんよ、そうじゃない？

ああ、うん。ごめんちょっと想像しちゃったわよ。

エイル・ベイザツハに限っていえばにつこり微笑んで手を差し出したりしたら気持ち悪いのでやっぱり却下。

でもさ、だからといって顔を合わせた途端にぴしゃりと窓を閉めるっていうのはどうかと思うのよ？

「ダアーリンってばっ」

「うるさい、黙れ。消えろ」

うわー、子供かおまえは。

あたしは嘆息しつつ、今は魔力を自在に操れる魔女としては窓を閉められたことなどものともせずに一瞬のうちに室内に入り込んだ。

「ちよつと人の話くらい聴きなさいよ」

大人気ないと思わない訳？

あたしが口を尖らせていえば、エイルは冷たい視線を更に細く、そして口調までも冷ややかに口を開いた。

「猫の話などきけるものか」

やっぱり？

あたしはエイルの机の上にちょこんと座りつつ、かしかしと鼻先をかいた。

「にやうん？」

「燃やすぞ」

「やあねえ。愛がないわ、愛が」

「猫に愛を求めるなっ」

「やあん、愛してるうっ」

あたしが愛らしく小首をかしげて言えば、エイルは引きつったままあたしを睨みつけた。

「そう言うのであれば何故私の前で人の姿をとろうとせぬのだ」

「あら、したくてしている訳じゃないのよ？ それは誤解よお」

「ほお」

うわ、信じてないわね。

ま、嘘だけどさ。百パーセント、う・そ・ですけどねえ！

あたしは哀れっぽく「なうー」と泣きつつ、自分の目元をかしかしとかいてみた。

泣いているように見えるかしら？ 猫だとちよつと微妙よね？
顔洗っているように見えたら失敗としかいいようがないわ。

「^{レイリッシュ}悪魔の呪いのおかげで猫と融合しちゃったあたしってばぜんぜんちつとも分離できないの。体内のバランスをとる為に猫姿がデフォルトなのよ！ ねえ、可哀想だと思わない？」

「……」
いや、胡散臭いものを見る目止めなさいよ。

確かに嘘が一杯だけどさ、本当のことだってちよつとは混じってるんだって。女の嘘はある程度許容しとけよ。

ロイズだったら信じるよ？ こっちが罪悪感で一杯になるくらいロイズだったらどんな嘘も信じるんだから。

本当に……悪い女に騙されるんじゃないかと余計な心配しちゃうわよ、あたし。

「こうなつた責任はとーぜんダーリンにもある訳だし、ここは一つ快く協力してよお」

「猫の頼みなど知らぬ」

くうっ、この根性悪！

猫が頼んでいるんだぞっ。白くて可愛い子猫がさっ。とまで考えて仕方ないとあたしは息をついた。

猫が両手の肉球を愛らしく合わせて「にゃー」とかいつちゃった日には、猫フェチ一級のロイズだったらどんな願いもきいてくれるに違いないのにつ。

というあたしの心の叫びは、生憎と心だけに留まらずに思いつきり口について出たらしい。

エイルは無表情であたしをつまみあげ、またしても窓を開け放ち外へと放り出した。

くそおっ、動物虐待反対だつてば！

あくまでも猫を相手にする気はないというのだな、あの野郎。

あたしは対抗意識をめらめらと燃え上がらせ、猫で駄目ならと仕方なく人型へと変化した。

こうなれば先手必勝「ごめんなさい」は無理といえども「ぜひ強力致しましょう」の言質を奪い取り、奴隷のようにこき使ってやろうではないか、エイル・ベイザツハめっ。

あたしはまたしてもエイルの執務室の机に転移を果たし、エイルの首にしなだれかかるようにして腕をまわし、アンニーナをまねて甘く囁いた。

「お・ね・が・い、ダーリン」

ダーリンの無駄に多い蔵書と、悪魔のような魔物融合術を是非ともあたしの為に役立てて！

やっとお願いを口にする、冷やかな瞳の男は忌々しそうに口にした。

「おまえ、私を馬鹿にしておるだろう」

低く唸る口調に、あたしは瞳を瞬いた。

「何よ、突然」

「報酬は？」

その言葉は思い切りあたしの意表をついた。

まさかエイルが報酬を求めてくるとは思わなかったのだ。

あたしはしばらく眉を潜め、むむむと唸ってしまった。

いや、確かにあたしに協力することはエイルにとって何かの利点につながる訳ではない。それにエイルの仕事の邪魔かもしれないが……

「友達じゃないか」

とふざけた口調で言ってみたが、相手の冷たい視線は変わらない。

あたしはむーっと困り果て、猫耳　相変わらずあつてスミマセン
ネ　をへたりと下げた。

「おまえに協力する代わり、私は魔女の研究の為にあなたの助力を
請う」

その言葉に、ぱつと耳が立ち上がった。

「そんなんでいいの？」

あたしの声のトーンが跳ね上がるのと同じ、エイルは口元を緩めた。

「ああ 良いな？」

「勿論よ、ダーリン！」

いやあん、なんか脅すように言うから「現金」とか「現物」とか色々想像してみたのだが、実際の要求はなかなか簡単そう。

そうよねー、ダーリンだってちよつとひねくれててちよつと性格がアレだけど、基本的には悪いヤツじゃないのよね！

「やあん、もおダーリンってば意地悪っぽく言うから身構えちゃったじゃないのお。魔女の研究ならいくらでも手伝ってあげるわよー」
だってあたし魔女だもん。

「その言葉、嘘ではないな？」

きちんと念を押す男に、あたしは「魔女の誓約は絶対だもの。嘘なんてつかないわよー」とへらりと応えたが

あれ……

あたしははたりと面前の、やけに甘い微笑を湛えた男を見返して言葉を飲み込んだ。

あれ、えつと……？

あたし、なんかまずいこと、言った、か？

何故か背筋にぞくぞくと悪寒が走り、あたしは自分の耳がへたつと下がるのを感じつつ、エイルの胡散臭い微笑を「はは？」と見つめ返した。

あれ……？

web拍手お礼小話つめつめ(11)

日本昔話、竹取物語。

昔竹取の翁ありけり……ではなく、第一隊隊長ギャンツ・テイラー氏が竹林を散策していると、奇怪な光る竹を発見致しました。ギャンツはいぶかしみ竹を叩き、とりあえず割ってみることに致します。するとどうでしょう。猫耳猫尻尾のそれはそれは 半泣きのブランドマージュが完全耳ふせ状態で身を震わせておりました。「これは可愛い！ 私の家に連れて帰って嫁にしよう」
「やめろーっ、やめっ、いやマジで止めて下さい」
「ふふふ、嫌がられるとゾクゾクする」

ブランドマージュは抵抗しようにも恐怖で身がすくんで動けませんでした。

かくしてギャンツは幸せに暮らしました。
めでたしめでたし。

*ギャンさんこれでも警備隊第一隊の隊長さんなので監禁とか誘拐とかは止めようよ。

あなたの目の前に白い猫がいます。

「つれて帰って風呂に入れてご飯をやって可愛がる」

あなたの目の前に白い猫がいます。

「普通の猫に用はない」

あなたの目の前に猫耳猫尻尾のブランマージュがいます。

「……耳は触ってもいいんだよな？ 尻尾は逆撫でしなけりゃいいか？」

あなたの目の前に猫耳猫尻尾のブランマージュがいます。

「紛い物のブランマージュになど用はない」

あなたの目の前に極普通のブランマージュがいます。

「えっと、どうしようか」

普通のブランマージュだどうしていいか判らないんですね、ロイズさん。

あなたの目の前に極普通のブランマージュがいます。

「」

いや、いいです答えなくて。答えなくていいですからっ！

* 全然関係ないですが、プロットの段階でエイルをエ、ロイズをロで書いていたら、二人並べてエロになって思考が停止したことがあります。うん、全然関係ないですがね？

白いオウムのルウがその小娘を見たのは、小娘が九つの頃。

それまでは実に平和な日々だった。

大事な主人であるエリイフィアと二人 もう一匹余計な使い魔はいたけれど、少なくとも自分の世界にはエリイフィアと自分だけの平和な日々だった。

新しく見出された魔女はエリイフィアに引き取られた。

名前はブランマージュ。赤みの強い金髪に好奇心の強そうな琥珀色

の瞳のチビ魔女だった。

「鳥だっ」

九つの小娘は瞳をきらきらして自分を見ていた。

鳥じゃねー、オレはオウムだ。キバタンだ。カッコイイだろう！

その羨望の眼差しに気をよくして、オレは羽をひろげて嘴でわざわざ身づくろいなどしてやった。

「エリイファイアっ」

とても嬉しそうに小娘は言った。

「コレ、今夜のご馳走？ あたし焼き鳥大好き」

小娘えええつつ。

ぜってえ泣かす！

オレ様の前で焼き鳥好きだとかほざいてんじゃねええつつ。

*その日戦いの火蓋は切って落とされた！

「あー、髭剃らないとなあ」

自分の顎先に軽く触れながらロイズがぼやく。

ロイズは熊だがそんなに髭が濃いほうではない。その為に三日にいったん程度しか髭をそっていない。

「あんたは髭も頭も濃くないもんねー」

「どういう意味だ」

ロイズが目を眇めるが、あたしは気にせずに口の中にマシユマロ

を放り込んだ。

「あれ、そういえばダーリンは？」

「……あいつが髭を生やしているのは見たことが無いな」

あたしは瞳をまたたき、エイルに思いつきり声を掛けた。

「ダーリン！」

「なんだ」

「ダーリンって髭生えないの？」

「……それが何だ」

「もしかしてどこもかしこもつるつる？」

あたしはめちやくちゃ興味津々でエイルの足を見たのだが、ロイズが慌てたようにあたしの襟首をつまみあげた。

「品の無いことを言うな！」

「品の無いことを言っているのはおまえだ！」

……知らない人はわからなくていいのよー？

「とりー」

耳障りな声がばたばたと足音をさせてやってくる。

オレは苦い気持ちで顔を背けた。

「ちきーん」

「誰がチキンだ、糞ガキ！」

「だって名前教えてくれないんだもん」

「だーれがおまえなんぞに教えるか。ばーか」

使い魔は主に名前を教えるが、それいがいの相手にはわざわざ名を教えたりしない。勿論、相手が主よりも上位の魔女ならば礼儀と

して教えることもあるが、すくなくともこのチビ魔女は到底名を教えてやれるような魔女じゃない。

そして使い魔の名は教えられない限り口にしてはいけないという決まりがある。

おまえなんぞ魔女の中でも最下位だ！

「鳥が教えてくれないから好きなように呼ぶのよ。馬鹿じゃないのっ」

朝からばたばたとうるさい二人に、エリィフィアは持っていた乗馬用鞭をふるい、びしりと椅子を叩いた。

「御黙り、その馬鹿二人っ！」

エリィフィアああ、オレは、オレは違うだろ。

ちくしょうっ。エリィフィアに嫌われたらどうしてくれるこの糞ガキっっっ。

きいいいっ。

「ルウ、煩いっ」

戦いはまだはじまったばかりだった。

「エリューシュ」

カチンときた。

チビ魔女が陽気な声でその名前を口にした。つまり、それはそいつが名前を教えたということだ。

エリユーシュ。

もう一人のエリイフィアの使い魔。

普通の狼の二倍は大きい灰色狼のエリユーシュ。

エリユーシュは無言でそのふっさりとした尾を動かし、ばしばしとチビ魔女を叩いている。

チビ魔女はそれを「遊んでもらってる」とでも勘違いしているのか、掴もうと手を伸ばしては逃げられている。

ふんっ。

ガキのお守りなんざオレには到底できないね。

馬鹿じゃねーかエリユーシュ。おまえは狼だろ。犬みたいに尻尾ふってんじゃねーよ。

オレは冷めた視線でそれを見つめた。

あーあ、プライドがないのかね、そんなガキの相手しちゃってさ。

チビ魔女の手ががしりと尾をつかみ、力任せに引っ張った。

途端、エリユーシュはがばりと顔を向け、ぐわっとその大きな口を開いた。

「くうんじゃねえっつ」

あぶねえっ、あぶねえよっ。

くそっ。ちきしょうっ。これだから肉食獣はあぶねえっ。

オレはぽわんっと人の形になり、大慌てでチビ魔女を引っつかんでエリユーシュから引き離れた。

「うわっ、鳥が人になった」

使い魔だからな！

つつか、何おまえは暢気に馬鹿なこと言ってるんだよつ。

くそつ、ってかなんでオレはこいつの面倒みなきやいかんのだ！！

……ルウの立ち居地が確定した瞬間。

「あげる」

まるで語尾にハートマークでもつけそうな勢いだった。

漆黒の魔女は満面の笑みで言う。

ロイズは困惑していた。

肩に乗ったまま離れないティラハールに。

まあ、手を伸ばして抱っこすれば普通に抱っこされるのだが、他におろすとその羽ではたはたと舞い戻り、肩に乗るのだ。

ほとほと困り果て、飼い主（？）に差し出そうとしたら、その飼い主（？？）がにっこりとそんなことを言うのだった。

「あげるって、猫の子じゃあるまいし」

「あんまり変わらなくてよ？」

いや、かわるだろう？

魔力など欠片もないロイズにしてみれば、魔獣や使い魔なるものに関わることなど滅多にありはしない。滅多というか、普通の生活でそれは考えられない。

「使い魔、ですよね」

思わず低く尋ねるが、

「主はいないの。もう死んでしまったから　　行き場がないからあ

たくしが面倒を見ていたのだけれど、全然言うこと聞かないし」

……そのいうことを聞かないティラハールは、ロイズに抱っこされた状態でレイリツシュ相手に歯をむき出しにしている。

「あなたのいうことを聞かないのがオレの言うことを聞くとでも？」

「聞きそうじゃない？」

あっさりと言われ、ロイズは眉をひそめた。

「オレ、猫を飼ってるんですが」

「猫は食べないと思うから」

「食うのかっ」

「食べないって言うてるでしょ 食べないわよね？ ティラハ」

そのあやしい確認は辞めろ。

「とにかく。オレは魔導師でもないし使い魔は無理です」

「無理ですって、ティラハ。どうする？」

その言葉に何を思ったのか、ティラハールはぼわんっといつも愛らしい少女姿になると、ロイズの腰に抱きついた。

「その姿ならいいだろうって言うてるけど？」

「もつと良くないだろ！」

「レイリツシュ！」

ぱりっとなんてレイリツシュは餅菓子をかじった。小気味良い音があたりを響く。

レイリツシュは塔の寝椅子に転がり、すばらしく自堕落に過ごしている。

「なによー？」

「分離のやり方が判らない！」

あたしの怒鳴り声に、レイリッシュはにっこりと笑った。

「奇遇ね？ あたくしも判らないわ」

「はああああ？」

「そもそもそれができればティラハールも合成獣のままじゃないわよ。あの子つては幾つ合成されてるか判らないのよねえ。あの声からしてセイレーンとかそのへんも入ってそうなんだけど、実際はちよつと判らないし」

なんですとつ。

「もういつそ産み落とせば？ 魂は魂だから、体を与えて体外に出せばいいのよ。」

ま、あんたは猫の体と融合しちゃってるけど。魂は出せるでしょー」

「はああああ？」

「いろいろ実験してみたんだけど、一応子供は作れると思うのよ？ 魔力が子宮に影響をあたえて子供が定着しづらいみたいだけど、あんたの体はそのへん細工してみたから。やってみれば？」

どんだけ人体実験してやがる。

「子作りなんざ一人でできるか！」

「やあねえ。そのへんの男引つ掛ければいいでしょ。あ、そうぞ、あんた押しかけ婿いるでしょ」

「いないわよ！」

もう本当にこの大魔女イヤだ。

ふえいす

「あれ、こんな顔だったっけ？」

あたしがあたしの体を取り戻して二月　といったところで相変わらず猫耳と猫尻尾を保有していますが、そこはあえて突っ込みない方針で。

放置してきた蝙蝠が自力ではたたと帰宅したのは二カ月後。

同じ大陸といえど、結構広いんだね。

「いやあ、蝙蝠って羽根持っている癖して案外動き鈍いんじゃないの？　いくらなんでも二月って、その存在すらしつかりと忘れてたわ」

「って、マアスタアア」

「な、訳あるかっ！」

切なそうな声をあげて飛んできたよれの蝙蝠を引っつかみ、あたしは思い切りベシンと地面にたたきつけた。

動物虐待？

訴えるなら訴えるがいいわ！

あたしはなあ、こいつの仕打ちを忘れていないぞ。

よりもよって自分の主人を裏切る使い魔がいてたまるか。

レイリツシュの馬面がレイリツシュを裏切るか？

エリィフィアのキバタン馬鹿オウムがエリィフィアを騙すことがあるのか？

絶対に、ナイ。

だというのに、この腐れ蝙蝠は自分の主の体のありかもレイリツシユの思惑もすべて承知した上で口をつぐんでいたのだ。

あたしの体で思う存分着せ替えを楽しみつっ！

帰宅して吃驚だよ。

知らない衣装が阿呆のように増えてた。

ハンドメイド・シュオン・オリジナルの衣装が。

力いっぱい床に叩きつけてやった蝙蝠だが、こちらの意思に反し、床に叩きつけられる寸前、ぼふんっと人形に変化し、そのままぎゅうつとあたしを抱き込んだ。

「マスター、会いたかった。会いたかった、会いたかったですうっ」

「くおのっ。まだこっちは許してないってばっ」

「えええ、どうして怒ってるんですか？」

滅びされ！

お前の頭は鶏並みか？

三歩歩けば忘れ去る仕様なのか？

このミジンコ脳みそっ。

ぎりぎりとおたしが奥歯をかみ締めると、相変わらず三割残念なエイルの顔のシュオンは本気で理解できないという様子で瞳を瞬き、こちらの怒りなどどこ吹く風で「マスター」とすりすりと頬を摺り寄せてくる。

「へへへ、会いたかったです」

「怒ってるんだってば」

「怒ってるマスターも好きだからいいです」

お前はどつかのDMと一緒にかつ。

くあああ、このお話にならない感じ、ホントウに、間違いないく、うちの馬鹿蝙蝠だわ。

あたしはイライラとしながら、ぐぐつと相手の腹を押して二人の間に隙間を作り、びしりと床を示した。

「お座りっ」

命令にシュオンはちょこんつと床板に座る。

へらへらと実に幸せそうに エイルの顔で。

ごめん、ホントウにソレ気持ち悪いわ。自分でやっというてなんだけどさ。

だってエイルだよ、エイル ちょつと想像してみてよ。あの悪魔類鬼畜目がさ、なんかぶんぶん尻尾振って大型犬みたいに嬉しそうに座ってるの。

これから怒られるって判っているのにだよ？

もう色々無理。

しばらくは罰としてエイルの格好のままでいさせてやるつもりだったが、これではどちらが罰を受けているのか判らない。

あたしは片手を軽くあげ、ゆっくりとお腹から呼吸を繰り返す。

お腹にあった酸素を全部吐き出し、ゆっくりと大気中の魔力を練り上げながら、今度は空っぽのお腹に溜め込んでいく。

手の中に出現した杖を道標に、あたしはシュオンの体に掛けられた自らの魔力の紐をゆっくりと解き上げていく。

エイルの灰黒の眼差し、塗れたような黒髪 薄い唇。

そのすべてが、徐々に失われて、そしてそこにちょんつと座ってい

るのは鳶色の人懐こい瞳と髪的青年。

エイルのような余計な色気など持たず、悪意も悪気もなさそうな脱力系。

「あれ、あんたってそんな顔だったわけ？」

うわっ、すごい違和感。

座った姿勢のまま、シュオンは自分の手を伸ばし、頬に掛かる自分の髪を引っ張った。

「ぼく、元に戻りました？」

「なによ？ 何か文句あんの？」

「いや、ほら。ぼくってば視力弱いから　いまいち実感が」
シュオンはいいながらひらひらと手を動かし、ふいに立ち上がるとやっと安心したように息をついた。

「ああ、マスターとの身長差が戻ってる」

言うや、またしてもシュオンはあたしの肩にがばりとはりついてぎゅゅと抱きついてくる。

「これで元通り。これですうつとぼくとマスターといつも通　」

そうか。そうか。それは良かったな。

あたしは相変わらず耳も尻尾もあるけどね。

一足先に元通りであんたはいいよね。

なんだかムツとしたものの、あたしは激しく脱力を覚えてひらひらと手を動かし、良かったなと示したやつたのにも関わらず、シュオンは突然がばりとあたしを離し、部屋の片隅にある鏡ににじり寄っ

て叫んだ。

「マスターああ、なんかやっぱり、顔違っっぱいんですがああ」

……半年くらいたつとほら、顔って変わるんだって、きっと。

「ちよっ、マスターっ」

今、今思い出すからっ、ちよつとまってる！

ちよつとやり方間違えたただけだって。

ちよっ、泣くなっ。

……ま、どつでもいいか。

告白

オレ、お前のことが好きだ。

一世一代の告白は、綺麗さっぱり流されてしまった。

「隊長？」

思わず握っていたペンがべきりと音をさせたことに、面前のクエイドは引きつった顔を浮かべてみせた。

「いや、はい。すみません。もっと真面目に書いてきます」

本日の日報の内容に怒りを見せたのかとでも思ったのか、慌てて提出した日報を引き抜くようにして逃げていくクエイドを見送り、警備隊第二隊の隊長を務めるロイズ・ロツクは眉間にくつきりと浮かんだ皺を右手の親指と人差し指で軽く揉み解した。

仕事中に考えることではないのは理解しているが、突如として思い出される感情はいかんともしがたい。

拳句「町に戻ったら話がある」とまで言ったにも関わらず、相変わらずブランマージュは自分の森には戻っていない。いや、第一隊のギャンツ・テイラーの話では一旦戻ったらいいのだが、その後は見かけていないそうだ。

実際は自分の家でギャンツを見てしまったブランマージュが自宅にあまり寄り付いていないだけの話なのだが。

では、ブランマージュはいつたどこに行ってしまったのだろうか。

エイルの家、か？

ふと浮かんだ魔導師の顔に、更に眉間の皺が深くなってしまった。

一年前のエイルといえば、しょっちゅう魔女と揉め事を起こして色々なものを破壊し、幾度も罰金を徴収されていたというのに、そもそもあの二人はいつの間に協定をむすんだのだろうか。

エイル・ベイザツハは現在魔女狩り大陸へと引越しの為に色々と手続きなどと忙しくしていると聞いている。もちろん、エイル当人からではなく、噂に聞く程度だが。

そんな忙しくしている場所にブランマージュがいるとも思えない。

「猫を撫でて心を癒そう」

もう今日は早く帰って猫のブランマージュを撫でまわそう。

今日も、ブランに会えなかった

そう、今日もブランマージュに会えなかった。

というのに、この現状はいったい何がどうしてどうなったのか。

ロイズ・ロックは帰宅し、いつも通り上着をエリサに手渡ししながら寝室の隣にある個人用の居間へと足を踏み入れ、目を見開いた。

「あら、まあ……」

エリサまでが驚愕した様子で瞳を瞬き、ちらりと自分の隣の主を見る。

普段であれば白猫のブランマージュが身を丸めて寝ている寝椅子に、クッションを抱くようにして寝ている魔女が一人。

前回会った時には猫耳も尻尾も無かったものが、今は気が抜けて

いるのか完全についている。

白い耳の先端が、ぴぴぴっと小さく痙攣した。

寝椅子に置かれているクッションにもたれて、くかくかと寝ているブランマージュの様子に「無断進入」だとか言っても始まらない。

ロイズは危うく「ブラン？」と声をあげそうになり、慌てて口元を押さえた。

「どう、致しましょう？」

エリサが動揺するのを片手で制して、ロイズは声を潜めた。

「いい 何か話があるのかもしれない。少し、二人にしてくれ」
暗に出て行けと命じて、ロイズはなんだか息苦しさを誤魔化すように自分の襟首に手を掛け、隊服のホックをはずして息をついた。

なんで勝手に人の家で寝ているのか、なんて魔女に言ってもはじまらない。

魔女は神出鬼没。どこからでも入り込むしどこにでも現れる。ならばここにいてもおかしくは無い。

消えてしまうのではないかと恐れながら、そっと近づき、触れてみたいという気持ちを留めて寝椅子の下に膝をつく。

口元から涎……

色気も何も無い。

苦笑と共にその涎を胸のハンカチでぬぐってやり。ハンカチを戻す。さらりと流れる髪はまさに猫っ毛で多少の癖がある。肩に掛かり、胸元をかすめる赤みの強い金髪。

日の光の下で輝くそれは、今は部屋を照らす魔道石の明かりで照らし出される。

ヤバイ。

ロイズは片手を宙に浮かし、引きつった。

触りたい。起こしたい。でもこのままそっとしておきたい。ずっと見ているのも手か。だがなんか色々もうちょっと。

いやいや、相手は魔女だ。まずは魔力を削がなければ何をされるか。魔力封じの封魔綱は　　ってオレは何を考えているんだっ。

危つく犯罪的な思想にいきそうになったロイズは、浮かしたままの手をぐつと引き戻し、こぶしを握り「こほんっ」と一度わざとらしく咳払いを落とした。

「ブラン、おい、ブランマージュ」

一度名を呼び、今度はおそろおそろブランマージュの肩にそっと手を掛ける。

ほかりと温かな体温が手に伝わり、長いこと眠っていたと思わせる微笑まじさに少しだけ目元が和んだ。小さく身じろぎした体に、べつたりとクッションにもたれていた頭が僅かに上がる。

ぼんやりとした琥珀色の瞳がロイズを捉え、不思議そうに見つめ

「にゃー」

「……」

ブランマージュはロイズの手にするりと猫のように頭をすりつけた。

「ブ、ブランっ？」

ばくばくと心音があがる。

まるで猫のような仕草の魔女に、悲鳴のような声をあげるとブランマージュは瞳を瞬き、がばりと体を起こした。

「なんであんたがいるのっ」

「って、ここはオレの家なんだが」

突然体を起こして怒鳴るブランマージュに、冷静に指摘すれば相手はきよるきよると辺りを見回し、しばらくしたのちに奇妙な声で「あれー？」と小首をかしげた。

途端、なんだかがつくりとロイズの気が滅入る。

「オレに会いに来た訳じゃないんだな」

「えっと……んー……いや、会いたいとは思ってたのよ。ちよつと話があつたし。ああ、だから無意識にここに来ちゃったのかしら？」
「やあね、と空笑いを浮かべてみせるブランマージュに、ロイズは一気に心が浮上した。」

「オレも話がある」

いや、だがこの立ち位置はどうだろう。

ブランマージュはクッションを抱き込み、寝椅子に座っている。対してロイズはといえば、その前で膝をついて半立ちの状態だ。

なんとなく居心地が悪く、ロイズは自然に　あくまでも自然になるように、寝椅子の淵に手を掛けてブランマージュの隣にどさりと腰を落とした。

なんだか無駄に緊張する。

ああ、コレは失敗か。ちゃんと相手の目を見て会話を成立させる上で、隣同士に座るといふのはどうなんだ。

生真面目な男、ロイズ・ロックの動揺をよそにブランマージュはひらひらと手を動かした。

「ああ、そうだった。で、あんたの話って何よ？」

ブランマージュがやっと思い出してくれた様子でちらりと隣のロイズへと視線を向ける。小首をかしげて促すその様子に、ロイズは緊張が高まり、引きつったように笑みを浮かべた。

「いや、俺はあとでいい。何か話があるんなら、ブランからいい」

そういうと、ブランマージュはおもむろにがばりと立ち上がり、真正面からロイズを見て 僅かにロイズを見下ろし、がしりとその両手をロイズの肩に掛けた。

「あんたのトコの第一隊隊長のドMをどうにかしろっ」

「……はい？」

「人の家を我が物顔で掃除してるのよっ。おちおち家に帰れないじゃないのっ。ひよこのエプロンして楽しそうに台所を占拠してるあのドMを即行どうにかしてよ」

ぜんぜん話が見えない……

そして見たくない。

「出て行けとか、馬鹿とか言っても逆に嬉しそうに照れるのよおお」

鳥肌がたつのか、自分の体をぎゅっと抱きしめるブランマージュは半泣きで訴え、感極まった様子で両手を伸ばし、ロイズの首に腕を巻きつけ、抱きついた。

「打つても、殴つても喜ぶってどうなってるのっ」

尊敬する第一隊隊長のそんな姿は心から見たくない。腕の中でさめざめと訴えるブランマージュをあやすようにばんぽんっとその

背を叩き、

「あー、うん。なんとかする。しばらく自宅に戻りたくないのか？
なら、オレの家にいてもいいんだぞ」

それが原因でブランマージュの森にいなかったのか、とやっと納得して　少しばかり照れを押し隠しつつ提案すると、しかしブランマージュはなんとか落ち着きを取り戻した様子で顔をあげた。

「提案だけ喜んで受けるわ。ありがとう」

「……大丈夫なのか？」

「大丈夫」

まさか、エイルの家に居るんじゃないよな？

心臓がつかまれるように痛む。とっさに思ってしまった事柄は
しつかりと口から出ていたらしい。

ブランマージュの瞳が瞬き、笑う。

「なんでエイル？　あの家でおちおち寝てなんてられないわよ。い
つ実験させられるか判らないじゃないの。

違うわよ」

さらりと言われた言葉に、自分の醜い嫉妬を見透かされたような
気がして羞恥が立ち上る。

かあつとあがる体温のまま、勢いに任せ

「ブランっ」

一度離れた相手の体を抱き寄せようとした途端、ブランマージュ
はとんと床を蹴っていた。

「ってことで、頼んだわよ。第二隊の熊隊長殿っ」

「ちょっ」

「じゃあねーっ」

って　オレの話はどうなったんだっ。

叫ぶ間もなく、ブランマージュの姿は忽然と消え去り　啞然と
しているロイズの足元で白い猫が「にゃーん」と頭をロイズの足に
摺り寄せた。

「……あのっ、馬鹿猫っ」

思わず出てしまった言葉に、自分が言われたのかと勘違いしたの
か白猫のブランマージュが思い切りロイズの足に爪をたてた。

「うわっ。違う　お前じゃないよ、ブラン」

怒っている猫を片手で掬い上げ、その顎下をなでながらロイズは
深く深く息を吐き出し、目の高さまで猫を持ち上げて切なく白猫に
囁いた。

「おまえが大好きなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102k/>

魔女猫番外地

2011年10月7日03時03分発行